

昭和 57 年度

一般国道 1 号袋井バイパス(袋井地区)

埋蔵文化財発掘調査概報

——坂尻遺跡第 3 次調査——

— 1 9 8 3 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

序 文

板尻遺跡は、昭和55年度の第1次調査以来、昭和57年度で約8,000㎡を調査することができました。

その結果、古墳時代から奈良時代、平安時代の人々の足跡を知る手がかりを見いだすことができました。現在の板尻遺跡のある所の真ん中を国道1号線が通り、車のとどえる時はありません。南側には東海道の松並木が見られます。恐らく古代においても交通の要地として、原野谷川の右岸に栄えたことだろうと推測されます。

発掘調査によって、多数の掘立柱の建物群や多くの墨書土器の出土などから古代の官衙跡として注目され、地方における律令制を研究するうえでも大変貴重な遺跡であることがわかりました。発掘調査とはいえ遺跡を破壊することで初めて得ることのできた貴重な資料です。今後、これらの資料を整理して報告書を作成し、古代を復元していくことが大切でしょう。

近年、急速に変容している袋井市。国道1号袋井バイパスの建設を始め、各種の土木工事、建設工事が行われています。そうした中で行われる発掘調査では、原始・古代・中世・近世そして近代に及ぶ遺構、遺物が発見されました。文化の時代といわれる今日、こうした埋蔵文化財はもちろん、その他の文化財すべてが、ふるさとを明らかにし、愛着をもたせてくれます。そしてそれらが、社会や生活のあり方などを学ばせてくれるだけに大事に保存、活用していく必要があることを痛感します。

板尻遺跡の発掘調査には数多くの方々の手を煩わしました。一年間の現場作業、資料整理に汗を流してくださった方々、発掘調査を見守り、いろいろな場でご協力をいただいた地元の方々、古代に関心を持たれ見学にこられた方々、皆様の暖かいご支援のもとに調査ができましたことを深く感謝いたします。

発掘調査にあたっては、建設省浜松工事事務所、県教育委員会文化課の方々には計画、指導を頂きました。また、京都工芸繊維大学の布日順郎先生、静岡大学の原秀三郎先生には玉稿を寄せて頂きました。考古学のみならず歴史学の関連分野の方々にもご指導、ご助言をいただきました。そうした先生方や関係者の皆様に心から感謝申し上げる次第です。

昭和 58 年 3 月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は昭和57年4月1日から和年58年3月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査（坂尻遺跡第3次調査）概報である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は、五島康司、吉岡伸夫（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 本書作成のための資料整理は調査員が中心となり主に森永明美、渡辺幸弘、平賀太、白田正子、神谷哲司が行なった。

また、次の方々の協力を得た。

寺田義昭、永井義博、松井一明、太田馬仔雄（袋井市教育委員会）、池田栄史、古谷毅（国学院大学）、深谷直子、芝田秀子、青山仁美

5. 本書は主に五島康司が執筆編集したものであるが、第1章第3節は吉岡伸夫が執筆した。
6. 付載として次の先生方に執筆をお願いした。
坂尻遺跡出土の絹織物について 布目順郎（京都工芸繊維大学名誉教授）
坂尻遺跡第3次調査出土の土器墨書について 原 秀三郎（静岡大学文学部教授）
7. 第5表の「坂尻遺跡出土器墨書一覧表」の釈文は原秀三郎教授に読み取っていただいたものを、佐藤正知君（静岡大学学生）の協力を得て作成したものである。
8. 別刷りの「坂尻遺跡主要遺構図」は第2次発掘調査及び第3次発掘調査の主な遺構のみを記載したものである。
9. 調査資料はすべて袋井市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 序 説	2
第1節 調査にいたる経過	2
第2節 立 地	2
第3節 地理的・歴史的環境	3
第4節 (1) 発掘調査の方法	8
(2) 調査経過	8
(3) 調査体制	9
第2章 遺 跡	10
第1節 遺 構	10
(1) 古墳時代の遺構	10
(2) 奈良時代の遺構	12
(3) 平安時代以降の遺構	17
第2節 遺 物	18
(1) 古墳時代の遺物	18
(2) 奈良時代の遺物	25
(3) その他の遺物	30
第3章 ま と め	30
付載 坂尻遺跡出土の絹織物について	布日 順郎 35
坂尻遺跡第3次調査出土の土器墨書について	原 秀三郎 40

挿 図 目 次

第1図	袋井市周辺の主要遺跡分布図	1	第11図	S I 38実測図	17
第2図	板尻遺跡周辺地形図	3	第12図	S D 19出土土器実測図(1)	19
第3図	原野谷川中流域周辺の 古墳時代中・後期遺跡分布図	7	第13図	S D 19出土土器実測図(2)	20
第4図	発掘調査区画図	8	第14図	S D 19出土土器実測図(3)	21
第5図	S D 19実測図	11	第15図	S D 19出土土器実測図(4)	22
第6図	S D 18実測図	12	第16図	S D 20出土土器実測図(1)	27
第7図	S D 20実測図	13	第17図	S D 20出土土器実測図(2)	28
第8図	S B 24実測図	15	第18図	S D 20出土土器実測図(3)	29
第9図	S B 25実測図	16	第19図	黒書土器実測図	34
第10図	S B 26実測図	16	第20図	主要土器黒書出土地点全体図	34・35間

表 目 次

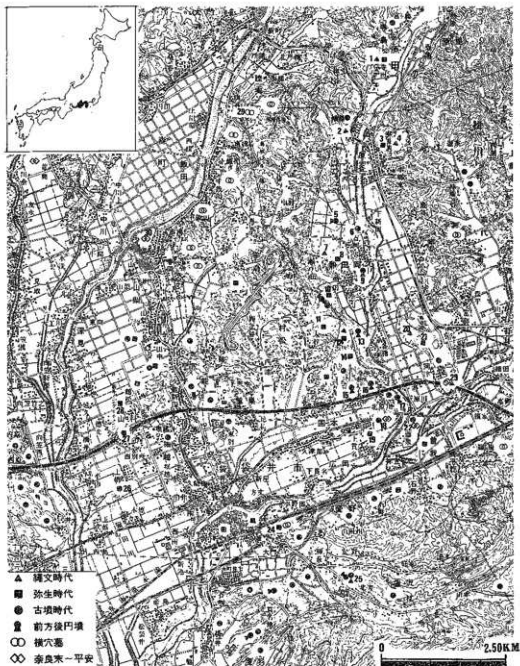
第1表	S D 19出土土器個体数表	10
第2表	掘立柱建物遺構表 (S B)	32
第3表	堅穴状遺構表 (S I)	32
第4表	溝状遺構表 (S D)	33
第5表	板尻遺跡出土土器墨書一覧表	(一)

図 版 目 次

図版第1	北区・西5区完掘状況
図版第2	北1区・西6区・中央00区完掘状況
図版第3	S D 21遺物出土状況・S D 21完掘状況・S D 23土器出土状況
図版第4	S I 38遺物出土状況・S D 19土器出土状況・2 E f イ区土器出土状況
図版第5	S D 25絹織物出土状況及び拡大図(1~6)
図版第6	絹織物断面拡大図7、8・その他の遺物(1~6)
図版第7	土器墨書(1~16)
図版第8	土器墨書(17~32)

別 刷 図 版

板尻遺跡主要遺構全体図



第1図 袋井市周辺の主要遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|------------|---------------|--------------|-------------|
| (1) 寺島遺跡 | (7) 瀬戸山遺跡 | (13) 金塚古墳 | (19) 国本遺跡 | (25) 長者平遺跡 |
| (2) 橘塚遺跡 | (8) 和田岡原遺跡 | (14) 浅間山遺跡 | (20) 岡津原Ⅰ遺跡 | (26) 土橋遺跡 |
| (3) 長福寺遺跡 | (9) 飯塚古墳 | (15) 浅間山古墳 | (21) 岡津原Ⅱ遺跡 | (27) 徳光遺跡 |
| (4) 本郷遺跡 | (10) 石原沢遺跡 | (16) 権現山古墳 | (22) 原川遺跡 | (28) 鶴松遺跡 |
| (5) 古岡大塚古墳 | (11) 久野山遺跡 | (17) 宇佐八幡内1号墳 | (23) 向山遺跡 | (29) 観音堂横穴 |
| (6) 春林院古墳 | (12) 陳屋北遺跡 | (18) 坂尻遺跡 | (24) 地藏ヶ谷古墳群 | (30) 稻荷領家遺跡 |

第1章 序 説

第1節 調査にいたる経過

昭和53年に袋井市教育委員会は、図1バイパス建設予定路線内について分布調査を行った。その結果、坂尻遺跡(袋井市国本名栗、北原川)、鳥居裏遺跡(袋井市国本上貫名-国本遺跡)、土橋遺跡(袋井市土橋)の3遺跡が確認された。

坂尻遺跡の存在する名栗、北原川地区(名北地区)は以前より水田地帯であったが、昭和36年の国道1号線開通以後、工場の誘致が行われ、国道沿いの水田に盛土をして工場が立ち並ぶようになってきている。現在、坂尻遺跡内には児玉化学工業、シノムラ化学工業、大和ハウス工業等が操業している。

このあたりの水田では以前地元の瓦業者による粘土採取が行われ、その際に土器片が水田から出土することが知られていたが、さらに昭和55年の袋井市教育委員会による遺跡分布踏査で数時代に及ぶ土器片が採取されたことにより、保存良好な遺物包含層を持つ複合遺跡であることが分った。

昭和56年の同心橋架けかえ工事に先き立ち、用地買収の進んでいる名北地区予定路線区内を全面発掘調査することが県教育委員会ならびに袋井市教育委員会と建設省で協議され、昭和55年12月より56年3月にかけて全面調査の基礎資料を得ることを目的とした予備調査が、名北地区工事区域内8000㎡で行われ、古墳時代から中世に至る遺跡であることが確認された。奈良時代については墨書土器の出土、掘立柱遺構の検出が注目された。——第1次調査(袋井市教育委員会、坂尻遺跡第1次調査概報、1981)

第1次調査の結果工事区域内の全面が発掘調査の対象となることが決まり、昭和56年4月より昭和57年3月にかけて国道1号線南側約4500㎡が調査された。(袋井市教育委員会、坂尻遺跡第2次調査概報、1982)これは昭和57年度より工事着手が予定されていた範囲である。その結果次のことが明らかとなった。

1. 古墳時代前期の古式土師器の出土及び、溝状遺構、土坑状遺構が検出された。
2. 古墳時代後期の祭祀的色彩の強い遺構が確認された。
3. 奈良時代では、帯金具、銅印、分銅、和同開珎などの金属製品、多量の墨書土器、掘立柱建物群が検出されたことから、官衙跡の可能性が強まった。

第3次調査は以上のような経過ののち、昭和57年4月1日より昭和58年3月31日にかけて3500㎡の発掘調査が実施された。本報告書は、第3次調査の概要である。

第2節 立 地

坂尻遺跡は、袋井市国本名栗地区に位置する。東海道線袋井駅より、国道1号線を東に約5km、袋井市の東端、掛川市との境にある。遺跡内をこの国道1号線が通っている。

遺跡の北側は遠く赤石山脈より派生した丘陵の舌状部の南端がせまってきている。掛川市八



第2図 板尻遺跡周辺地形図

高山より流れてくる原野谷川がその丘陵の東側を浸蝕しながら、流路を南から南西へと大きく向きを変え、掛川市方面から流れてくる垂木川、逆川と板尻遺跡の南西約1kmで合流する。板尻遺跡は、これら三つの河が近接して流れる西岸に位置する。

第3節 地理的・歴史的環境

板尻遺跡周辺の総合的な遺跡分布については今回割愛する。第1次調査報告書（吉岡 永井他1981）に詳述されているので参照願いたい。

i 地理的条件

遠く赤石山系に源を発した原野谷川は狭小な沖積地を形成しつつ南流し、小笠山丘陵にぶつかって河道を西に転ずる。この河道転換点付近は東から流れる逆川・垂木川との合流点にあたり、原野谷川が水量を増し始める地点でもある。遺跡は河道転換点から西へのびる自然堤防の緩斜面地（標高15.50～17.50m）に立地している。北側すぐに各和原台地（標高50m前後）の末端丘陵が迫り、また南側には川小の三河川を挟んで急峻な小笠山丘陵（標高264m）が分布している。板尻遺跡が古墳時代前期から奈良・平安時代、中・近・現代におよぶ複合遺跡であることはすでに述べた（吉岡 松井他1982）。千数百年の長きにわたり人々が「板尻の地」を人間生活の何らかの場所として選択してきた地理的背景には、そこが後背低地をひかえた自然堤防という、いわゆる「高燥の地」であったからばかりでなく、中遠地域を東西に分割する

各和原台地と小笠山丘陵の接点、つまり連続する地形的高まりのなかで、河川にそった唯一の沈降部であったことを指摘することができよう。中遠地域全体に視野をひろげてみても、「坂尻の地」は東西交通・地域社会の要地となるべき地理的条件をそなえていたのである。

ii 歴史的条件

遺構（竪穴住居跡—S I 37、溝状遺構—S D 23）を伴う和泉期の遺物包含層が確認されたことは、坂尻遺跡第3次調査の一つの成果である。また掛川市・静岡県教育委員会が継続的に実施してきた各和原台地における中期古墳の測量調査は、今まで不明確な点の多かった中遠地域5世紀代の考古資料を飛躍的に充実させた。本節では以上の測量調査結果を参考にして、坂尻遺跡をとりまく古墳時代中期の政治的・社会的状況の一端を考えてみたい。

第2次調査概報（吉岡 松井他1982）で若干ふれたが、まず文献資料からみた古墳・奈良時代の状況をふりかえてみる。一支配領域を中・東遠地域に比定しうる国造には、『先代旧事本紀』巻第十、国造本紀に記載された久努・素賀の国造がある。令制施行後、国造の名称は一般的に国郡名として採用されるが、両国造名が国郡名となることはなかった。ロー令制下、現在の袋井・掛川市域に設置されたのは佐益郡であり、この郡名の由来となる氏族は『先代旧事本紀』巻第五、天孫本紀に記された佐夜直と考えられる。一佐益郡は大部であったと思われる、養老6年（722）山名郡とに分割された。こうした国造名・郡名に関する問題は、中遠地域における政治勢力が古墳時代から奈良時代にかけて、決して安定したものではなかったことを物語っている。

南流する原野谷川の西岸、坂尻遺跡北方に広がる丘陵地を各和原台地と呼んでいる。台地上には全長50m以上の前方後円墳（黒塚・各和金塚・吉岡大塚古墳）をはじめ、大形古墳が東西0.7km南北2.3kmのなかに5基築造され一大中期古墳群を形成している。

春林院古墳 掛川市吉岡字下の段。円墳。径30m高5m。もともと上流域の台地北東端に立地する。墳丘には葦石が2段にめぐり、墳頂部のやや南に偏して割竹形木棺を被覆した粘土槨（全長2.84m幅1.35m高0.95m）が構築されていた。粘土槨の北側から剣、鏃、針状鉄製品が、また墳頂、葦石内より壺形土器、壺形埴輪片が発見されている（内藤1966）。

黒塚古墳 掛川市吉岡字女高。前方後円墳。全長63m 後円部径37.8m高5m 前方部幅25.2m高3.5m。主軸をほぼ南北に向け台地東端に立地する。幅7m前後の周濠と墳丘には上下2段に葦石がめぐり、円筒埴輪列の存在も推定される。前方部西側の墳丘裾部に石堤（幅50～60cm高30cm）を築いていた（平野他1979）。明治30年代に後円部墳頂で発掘された主体部は、小規模ではあるが棺全体を被った粘土槨（約2m四方高1m）と考えられ、獣形鏡、滑石製勾玉、碧玉製管玉、刀子柄残欠を出土している（静岡県1930）。黒塚古墳出土の壺形埴輪は複合口縁を有し、首の異常に長い器形を呈する（内藤他1966）。

* 原野谷川流域に成立した有力な古墳には、他に画文帯神獸鏡を出土した岡津奥の原古墳がある。また掛川市西郷の丘陵上には、全長100mを超える大形前方後円墳（下山古墳）があったと伝えられるが、両古墳とも削平され詳細は不明である（静岡県1930）。

行人塚古墳 掛川吉岡字女高。前方後円墳。全長42m 後円部径28m高不明 前方部幅推定17.5m高不明。主軸を東西方向に向け、台地端からやや離れて内側に立地する。周濠を有するが、墓石、埴輪列等外部施設の状況は明確でない。出土品も一切知られていない。

各和金塚古墳 掛川市各和金字金塚。前方後円墳。全長66.4m 後円部径51.2m高6.5m 前方部幅20.5m高4m。台地から東へ突出した小支陵頂部に立地する。主軸は南北方向を呈する。墳丘は急峻な丘陵斜面の一部を削り出し、また盛土することで築かれている。周濠、外堤を有し、小円墳を伴う。後円部は二段築成。墳頂部と中位の平坦面(幅約2.5m)をのぞいて、墳丘全面に葺石がめぐり、葺石には縦方向の石列が認められる。また後円部上段の裾部、墳丘末端に堀石(人頭大礫)が並べられていた。築造当初、前方部に一段、後円部には二段(墳頂部周縁と後円部の平坦面外縁)の埴輪列が存在したものと推定される。後円部中央に位置する主体部は河原石積みの竪穴式石室(全長4.75m幅0.75~0.85m高0.4~0.6m)である(平野渡辺他1981)。石室内から剣—25以上、鉾—1がまとまって出土し、他に短甲片、大刀、刀子、鐵等の鉄製武具類と、大刀、斧等を模した滑石製模造品が採集されている(岩井1974)。短甲は三角板の革綴であった可能性が大きい。

吉岡大塚古墳 掛川市高田字大塚。帆立貝型古墳。全長55m 後円部径41.3m高7.2m 前方部幅27.5m高2.5m。台地端から隔った丘陵頂部平坦面に、主軸を東西方向に向け立地する。いわゆる「くびれ型」周濠(幅約11.5m)と外堤(上面幅約7m)が完周し、後円部は二段築成。墳丘には葺石がめぐり、後円部上段の葺石には縦方向の石列(人頭大礫)が認められる。墳丘裾部に石堤(=堀石 幅約50cm)を築いていた(植松他1979)。墳頂部に埴輪列があったとされ(内藤1966)、後円部の平坦面(幅約1m)付近からも埴輪片が採集されている。主体部は未発掘であり、出土遺物はまったく知られていない。

以上が各和原台地に成立した中期大形古墳の概要である。築造順位についてさまざまな見解が出されているが、吉岡大塚・行人塚古墳を新しくする点で一致している。壺形埴輪に注目すれば春林院・瓢塚古墳は古く位置づけられるであろうし、鉄製武具類を主体とする副葬品の組成は各和金塚古墳の築造期を遡らせる要素である。吉岡大塚・行人塚古墳の出土品が知られていない現在、築造順位を推定することは難しいが、5基の古墳はすべて5世紀代に成立したとみて大過ないと思われる。

後円部直径の $\frac{1}{2}$ を単位として前方後円墳の築造企画を示せば、瓢塚古墳—5区型・行人塚古

* 行人塚古墳の記述については渡辺康弘、松本一男両氏から多くの教示を得た。感謝いたします。

** 春林院古墳—各和金塚・吉岡大塚古墳(内藤1966)。各和金塚古墳(中期前半)→瓢塚古墳(中期中葉)→吉岡大塚古墳(久永他1970)。各和金塚古墳(5世紀初頭)→瓢塚古墳→吉岡大塚古墳→岡津奥の原古墳(平野他1979・植松他1980)等の見解がある。

*** 石部正志・田中英夫・宮川渉・堀田啓一四氏の共同研究による築造企画の表記方法に従った(石部1981)。頁数の都合により図面を提示できなかったが、概観等に掲載された墳丘図をたよりに推定復元した各前方後円墳の築造企画は次のとおりである。瓢塚古墳 全長62m後円部径38m前方部幅24m、行人塚古墳 全長45.5m後円部径28m前方部幅17.5m、各和金塚古墳—全長68m後円部径55m前方部幅25m、吉岡大塚古墳—全長64.5m後円部径41.5m前方部幅26m。

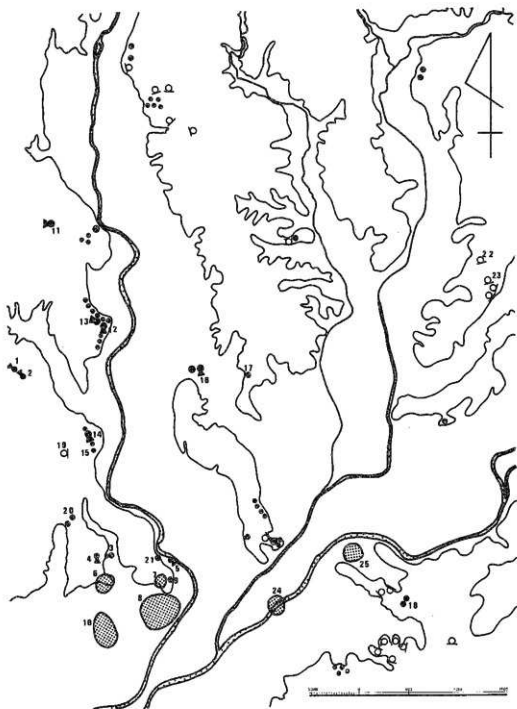
墳—5区型、吉岡大塚古墳—2.5区型となる。各和金塚古墳は盛土された後円部上段径（中位平坦面の内縁径）を設計基準としていたらしく、墳丘は一見4区型を呈する。丘陵斜面を削りだした後円部直径は11単位であり、実際の墳丘形態は変則的な2.5区型の前方後円墳（帆立貝型）である。こうしてみると4基の前方後円墳の築造企画は瓢塚古墳＝行人塚古墳、各和金塚古墳＝吉岡大塚古墳で一致する。また各和金塚・吉岡大塚古墳の外部施設には多くの共通点（外堤の存在、後円部二段築成、裾石＝石堤、縦方向の石列）が認められ、両墳墓はきわめて類似した形態・構造を有していると理解されよう。

中期古墳は巨大であり、そこに卓越した専制者の存在を強調するあまり、特定の地域に集合した中期大形古墳群の系譜をあくまでも一系列と考え、背後にある政治勢力を安定したものと捉えすぎていたのではなかろうか。瓢塚・各和金塚古墳の築造期に著しい時期差は認められず、群内には春林院古墳のような円墳も含まれている。各和原台地上に近接して形成された中期大形古墳の被葬者は、当時原野谷川流域を支配した専制的な政治権力のなかで、異なる勢力の首長として存在していた可能性もあながち否定することはできないように思う。

坂尻遺跡から検出された各時代の遺構・遺物から、地域史資料との関連のなかで、いかにして生き生きとしたものを見つけだしていくか報告書作成に向けての最大の課題である。

参 考 文 献

- 古岡伸夫・永井義博他 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書-板尻遺跡第1次調査-』 袋井市教育委員会 1981
- 古岡伸夫・松井一明他 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報-板尻遺跡第2次調査-』 袋井市教育委員会 1982
- 内藤晃編 『春林院古墳』 春林院古墳調査委員会 1966
- 平野台郎他 『瓢塚古墳 測量調査報告書-』 掛川市教育委員会 1979
- 静岡県 『静岡県史・第1巻』 1930
- 平野吾郎・波辺康弘他 『各和金塚古墳-測量調査報告書-』 掛川市教育委員会 1981
- 岩井克允 「付載 各和金塚古墳について」『水重二ツ池古墳群』 掛川市教育委員会 1974
- 植松幸八他 『吉岡大塚古墳-測量調査報告書-』 掛川市教育委員会 1980
- 内藤晃 「古墳文化の地域的特色—東海」『日本の考古学・IV』 河出書房 1966
- 久永春男他 『高代山古墳群』 掛川市教育委員会 1970
- 石部正志 「Ⅲ 超巨大古墳を考える」『巨大古墳と倭の大王』 青木書店 1981



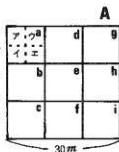
第3図 原野谷川中流域周辺の古墳時代中・後期遺跡分布図

- | | | | | |
|--------------|-----------|-------------|--------------|---------------|
| (1) 石原沢2号墳 | (6) 不入斗遺跡 | (11) 吉岡大塚古墳 | (16) 高代山古墳群 | (21) 宇佐八幡内2号墳 |
| (2) 石原沢1号墳 | (7) 石ノ形遺跡 | (12) 瓢箪古墳 | (17) 奥ノ原古墳 | (22) 金谷B横穴群 |
| (3) 極現山古墳 | (8) 坂尻遺跡 | (13) 行人塚古墳 | (18) 東照ヶ谷1号墳 | (23) 金谷A横穴群 |
| (4) 浅間山古墳 | (9) 石ノ形古墳 | (14) 名和金塚古墳 | (19) 菅ヶ谷横穴群 | (24) 篠場遺跡 |
| (5) 宇佐八幡内1号墳 | (10) 国本遺跡 | (15) 金塚古墳群 | (20) 東山古墳群 | (25) 領家遺跡 |

第4節

(1) 発掘調査の方法

発掘調査区画は、第1次、第2次調査のものを踏襲した。大グリット（30m×30m）の中に中グリット（10m×10m）を設定し、さらに小グリット（5m×5m）を設定したものである。グリットの方向は磁北に合わせてある。大グリットはA—J、中グリットa—i、小グリットはアイウエで表記した。1つの大グリットの中には中グリット9、小グリット36が設定されている。



遺構名は大グリットごとに付けられ、遺物の取り上げは小グリット別に行った。

発掘調査区画図

第4図

発掘方法は、図面作成、写真撮影、作業能率を考え200㎡～400㎡を1区とした。国道1号線北側を西より、北1区～9区とし、国道南側は、56年度調査に従い、西方より西5区、西6区、東より中央0区、中央00区、57年に追加買収のあった区域は中央0区南とした。これらの作業区を1区画として、調査を進めた。

遺物の確認は、遺物包層が厚く（70cm～90cm）各時代の遺構、遺物が混在しているため、10cm～20cmずつ掘り下げ平面調査を行った。

(2) 調査経過

1982年 4月～6月

4月より発掘調査の計画が立てられ、器材の準備を進めた。

5月13日より現地調査が開始され、重機による表土の掘削が開始された。国道南側の西区および中央区から調査に入った。安全ロープ、排水溝、集水枡等の設営が行われたが雨天の日のが多く作業に手間どる。6月に入り建設省より国道北側の工事計画が早まったため調査計画の変更を要請された。協議の末、南側の調査を一時止めて、北側に全力を注ぐことにする。北1区より土師器壺類を多量に出土する竪穴状遺構S130を検出。北3区SD25より茶褐色の布残片を検出し、木枠を細み取り上げる。

7月～9月

調査区ごとに排水溝及び集水枡を設けるが、雨天の日の続き水のくみ出し作業に追われる。北1区から4区に調査が広がり、東西に流れる溝SD18を検出する。

スライド上映会が坂戸遺跡の説明会を兼ねて7月24日に開催された。袋井市内の方々や子供達が集まる中、発掘調査の様子のスライド上映や出土遺物の説明などが行われた。

8月に入っても雨天の日の続き遺構確認作業、写真撮影に手間どる。

建設省の要請により北1区から4区の調査を9月末までに終了することになり、無理を押しての調査となったが9月30日に発掘写真と撮影を完了する。

北1区で竪穴住居跡と考えていた土器の一括資料を伴う遺構は、その後の調査でSD19と同一遺構であることが判明し、溝状遺構として処理することとした。

10月～12月

10月より国道北側の北5区～7区及び国道南側中央00区の調査に入る。国道1号線をはさんでの調査となり、交通量の多い所であるため作業員の調査区移動など神経を使うこととなった。

10月16日に現地説明会を行う。折りから開講されていた市史講座の聴講者の他、多くの市民の参加が得られた。

中央00区より井戸跡S I 38を検出し、中から編合などの木製品が出土する。西6区では西5区にまたがって東西方向4間の総柱の建物が確認された。西5区S D 22、中央00区S D 24より帯金直の巡方と裏金が出土する。

北5区では杭列遺構を伴った溝S D 21から木簡、木製品の鋤2点、馬の蹄などが出土した。56年度の調査で確認されたS D 2とつながるものであろう。

北8、9区に排水路、集水枡を設ける。

1983年1月～3月

国道南側側溝工事本年以内に完了させることが協議され、調査計画が練り直され2月上旬までに西6区を完掘することになり、調査員、作業員に負担をかけることとなった。さらに、中央0区に隣接する農地が農道工事に伴い新たに買収されたため、本年度調査区分として中央0区南を緊急に調査することになった。

中央0区南には、使用中の農道が通り十分な調査期間を取ることができなかった。中央0区から東南へつながるS D 24が検出された。その溝からは「三年水鉢 駅」「市」などの墨書土器が出土し、溝上層からは小型の水瓶の入った短頸甕が出土した。

西5区では、最終面よりS I 37のすぐ横で直刀が出土した。北4区では、柱穴が多数検出されたが、調査面積が狭いため、それぞれの掘立柱建物の規模等十分確認することはできなかった。北6、7区では竪穴住居跡と考えられる遺構から「口根野家」「驛長」等の墨書土器が出土した。

西6区最下面の古墳時代前期の溝から和泉期の土器の一括資料が出土した。本年度の調査は3月末日をもって終了し、埋め戻しにあたっては遺構保護のため砂まきを全面に行いすべての作業と器材の撤収を完了した。

調査予定区域内における国道1号線への出入口等は、仮設道路を設けることにより、予定区域内すべてを調査完了することができた。これらの仮設道路設置にあたり地元の方々そして、シノムラ化学工業、児玉化学工業、コーエー食品工業、似津美屋、杉村忠一氏に埋蔵文化財発掘調査に御理解をいただいたことを感謝し、お礼を申し上げます。

(3) 調査体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課 山下晃(同文化課 指導主事)

調査担当者 五島康司、古岡伸夫(袋井市教育委員会 社会教育課)

調査補助員 前田庄一、荒生健志、早川保子、鈴木みず江、嵐田勝子、高野由美子、森永明美、平賀太(奈良大学学生)、神谷哲司(東海大学学生)、鈴木基能(武蔵工業大学学生)、白田正子、岡本利秋、藤田摩子、渡辺幸弘、鈴木勢津子、

竹田宏司、小松利明（国学院大学学生）

- 発掘作業員 小林金次郎、安達頼信、石川本一、松下円平、加藤幸太郎、三浦政平、三浦久雄、石川隆司、石川一二、川村義雄、山内保、山本崎子、山本まさ子、石川つま、鈴木敏子、海野こう、米沢昭子、萩田千代子、原田愛子、大場佐住子、太田清子、吉良すず、海野とき子、三浦とく江、福田きよ、石川里子、鈴木きみ子、戸倉光子、原田なみ、足立たい
- 資料整理員 山内たづ子、小林たづ子、足立裕子、原田安江、山田郁子、山崎宏美、兼子弘美、高木真澄

次の方々から多くのご教示、ご指導をいただきました。深く感謝いたします。

向坂鋼二、川江秀幸、平野吾郎、瀬川裕市郎、山村宏、原川宏、八木勝行、柴田裕、山口和夫、中島郁夫、池田栄史

第2章 遺 跡

第1節 遺 構

(1) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、土坑状遺構、竪穴状遺構、溝状遺構などがある。ここでは主な遺構について概要を述べたい。

土坑状遺構として、2C区S I 31、2D区S I 32、2E区S I 39等が検出された。

2C区S I 31は平面プランが楕円形で約2.5m×2m、深さ約0.6mを測る。覆土上層は暗灰色粘土で有機質を多く含んだ層がたがいに互層となっている。和泉期の高坏が3点出土している。2D区S I 32も形態及び覆土がS I 31と同様の土坑であったが遺物の出土はほとんどなかった。

2E区S I 39は、長径76cm×短径70cm程で平面形は隅丸方形である。深さは約58cmで底部より小型の甕（器高11cm、口径7cm）が2点出土している。

3D区S I 37は、東西6.4mを測る竪穴住居跡である。北側については調査区域外のため確認されなかったが壁高が約11cm、平面形が隅丸方形の竪穴住居跡であった。第IV層というべき青緑灰色粘土層を掘り込みつくられていた。覆土は暗灰色粘土であった。住居跡東壁より東へ

第1表 S D19出土土器個体数表

环(須恵器)	9	高 坏	2
环(土師器)	26	甕	3
甕	7	甗	1
壺	4		

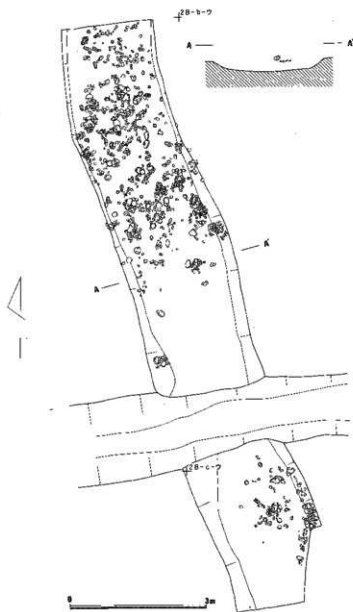
环・高坏・甕は残存率約1/4以上、甗・壺は約1/4以上のものを数えた。甗の残存率約1/4。

約80cm外へ出たところで住居跡の壁と平行な位置で刃刀（切っ先部分欠損、現存長約43cm）が出土している。

古墳時代の溝は調査区はほぼ全域で検出している。3E区S D 23は北から南東へ流れる溝で幅約1.7m、深さ約0.5mであった。（図版3-3）両端は調査区域外へのびていたが、約6mを調査することができた。この溝からは和泉期の土器が完形に近いもの

を含め多数出土している。今後5世紀代の良好な一括資料として十分な検討をしていきたい。

S D19は、2 B区をはば南北に流れる溝（第5図）である。南北両端とも調査区域外にのびているが溝の幅は約2.5m程を測り、深さは約50cm程である。比較的ゆるやかなU字形の断面を持った溝である。東西に流れる溝S D18によって断ち切られているが検出された範囲では、北側部分約5mの広がりに土器の集中がみられた。（図版4—2）また、南側部分でも高坏を中心とする土器の一括出土がみられた。（第12・13・14・15図）



第5図 S D19実測図

北側の土器集中部分では、坏類を主とする一括の土器が出土したが、これら山土土器の器種別数表は第1表のとおりである。特に坏類の出土点数が多く、注目される。これらの坏は4ヶ所において2枚重ねの状態出土している。そのうち3組は須恵器の坏に土師器の坏が重ねられており、もう1組は土師器の坏と土師器の坏が重なった状態で出土している。

SD19については、この二枚重ねの坏と他のほぼ完形の坏とが一定の並びをもって位置していることや、これらの坏の多くは上をむいていることなどから、祭祀的色彩の濃い遺構と考えられる。今後、坏以外の土器を含め遺物の出土状態を十分検討していきたいと考えている。

② 奈良時代の遺構

溝状遺構

奈良時代の溝状遺構についても調査区のほぼ全域で検出しているが、主な遺構について概要を述べたい。

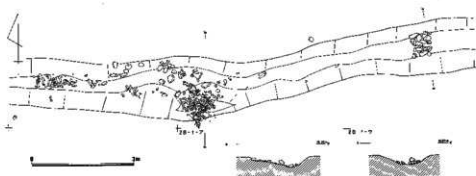
2 E区SD21（図版3-1・2）は、幅約5m程あり、遺構確認面から底までの深さは約1mを測る。二段掘りの断面形態を持ち、北西から南東へわたる溝である。南西の岸には溝の護岸施設と考えられる杭40cm～90cmの間隔で不規則に打たれ、約1.3m×0.2mの板材が横木として止められてあった。15cm～20cm程の円礫が壁面より溝中心にかけて出土している。溝の断面形態及び護岸施設の状態から56年度に調査された国道南側のSD2につながる溝と考えられる。

SD21は調査範囲が狭く、約6mが調査されたにとどまったが、土器以外にも木簡1点（墨書は判読できず）、鋤先2点等が出土した。出土土器の多くは奈良時代の土器であるが溝内の流路下部では古墳時代Ⅳ期前半の坏が出土している。

SD22は3 D区をほぼ南北にわたる溝で幅約2m深さは約20cm程である。国道北側2 D区で検出されたSD20につながる溝と考えられ奈良時代前半の土器が出土している。

SD24はF区を北西から南東へわたる溝で幅2.8m深さ0.8mを測る。奈良時代の土器が出土したが、下層からは古墳時代後期の土器が出土している。東南部分の最も上層で口縁部を一部欠いた短頸甕の中から糸切り底を有する小型の水甕が出土している。

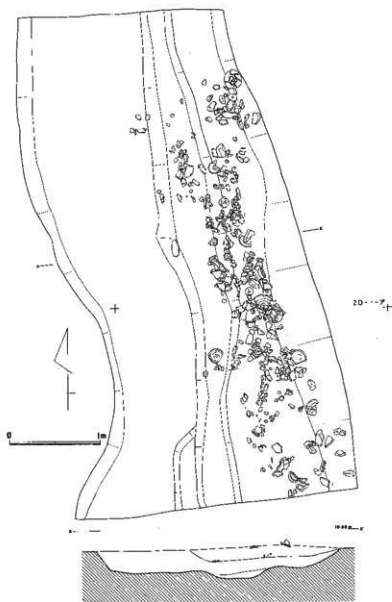
SD18は、同道の北側調査区をほぼ東西に流れる溝（第6図）である。東端は2 C区の北側



第6図 SD18実測図

調査区域外にのびるため確認できない。西端も2A区西側調査区外にのびている。約62mが調査された。遺構確認面における溝の深さは約95cm、溝の幅は約1.5～1.8mであった。

(第6図)は、2B区の部分を示している。ここでは、礫の集中遺構が3ヶ所検出された。束埴の遺構では、10～20cm大の礫が溝の底部に集中して置かれてあった。一部分ではあるが礫が二段に重なって検出されたことから、以前は二段積みであったものがくずれたと考えられる。



第7図 SD20実測図

中央の遺構は、溝の南岸に100cm×40cm程のテラス状の段を有するものである。このテラスの部分には、直径約3cm～5cm程の小石が疎間なく敷き詰められている。テラスより北西の方向には20cm大の礫が、溝の側面及び底部へと並んだ状態で検出されている。

他の遺構に比べると礫が少ないが西端の遺構でも、約7cm～10cm大の礫が、溝底部に集中して置かれて検出されている。SD18の北側には、SB16、SB18、SB19が検出されているが、この東西に流れるSD18は遺跡の北側を向する溝の一つと考えることができるだろう。この溝からは7世紀前半及び8世紀代の遺物が出土している。

これらの円礫を用いた遺構については溝に伴う施設として一応考えられるのではないかとと思う。

SD20は、2D区を南北に流れる幅約2.7m程の溝(第7図)である。北、南側とも調査区域外に及ぶため、5m程が発掘調査された。遺構確認面からの深さは、約35cm程の浅い溝である。二段掘りの溝で、溝断面はゆるやかなU字形であった。覆土には木炭と灰の混入が見られ、西岸部分では大炭と灰の層が約2m×1.5mに広がり、厚さ2cm～6cm程に堆積していた。このSD20からは、奈良時代初頭と考えられる土器が出土している。(第16・17・18図) 全般的に須恵器が多い。坏類の出土が多いが長頸甕なども出土した。土師器は甕類が出土している。いずれも破片が多く、破砕されたものを廃棄したものと考えられる。

掘立柱遺構群

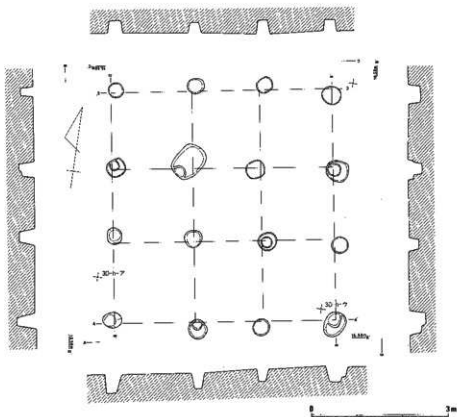
昭和56年度、第2次調査で検出された掘立柱建物は15棟を数えるが、今回の第3次調査ではさらに18棟が確認された。完掘されたもの6棟(2間×2間、5棟)、(3間×3間、1棟)。調査区域外に建物が及んでいるため柱間規模が確認できなかったものが12棟あった。柱間等の法量及び主軸方向は別表(第2表)の通りである。

ここでは、3D区より検出された建物のうち3棟についてふれてみたい。

3D区では、12m×25mの調査区の範囲に9棟の掘立柱の建物が検出されている。これは板瓦遺跡の調査区の中でもっとも建物が集中して検出された区域といえよう。

SB24(第8図)は、南側をSB25と重複させて検出された3間(4.88m)×3間(5.08m)の床束柱をもつ建物である。桁行柱間寸法は平均で1.62m、梁行柱間寸法の平均は約1.69mである。柱穴は直径40cm程の円形を呈し、深さは約30cmであった。柱根は遺存していないが直径20cm～30cm程の柱痕が確認されたものが7本ある。建物の平面形はほぼ方形に近いが、梁行方向の方が1.8m程長く南北棟の建物と考えられる。SB24の柱穴がSB25の柱穴によって切られていることからSB24の建物が崩壊したのちSB25が建築されたと考えられる。

SB25(第9図)の建物については、南側が発掘調査区域外となるため規模については全体を捉えることができなかった。確認された規模は東西列が7.64mで4間(柱間寸法平均1.91m)南北列は、一間(柱間寸法約2.2m)のみの検出にとどまった。南北列の柱間の方が広いことから、南北棟の建物と考えられる。柱穴は直径70cm～80cmと大型の円形で遺構確認面から深さ約55cmを測ることができる。ほとんどの柱穴で柱痕が確認されている。総柱の建物であった。板瓦遺跡の発掘調査で検出された建物の中でもっとも大きい建物である。(56年度の調査で検



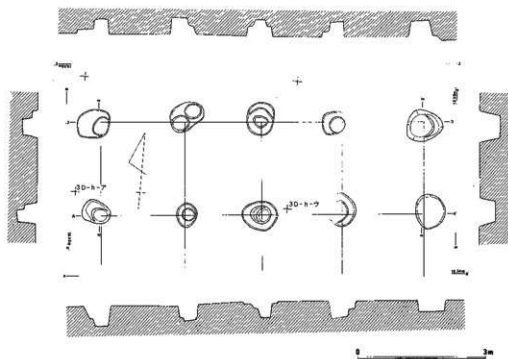
第8図 SB24実測図

出されたSB12は2間×4間であったが総柱ではなかった。）

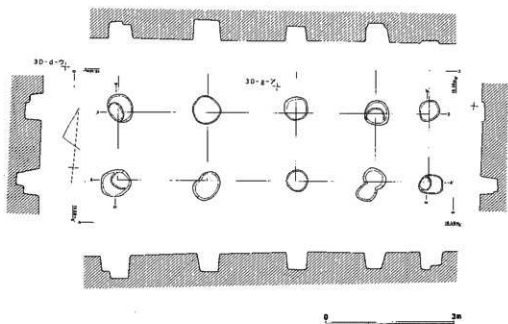
SB26（第10図）はSBの北方に位置する建物で、北側部分は調査区域外にあるため全容は確認できなかった。確認された柱間規模は東西列が7.3mで4間、南北列は1間のみの検出で1.6mを測る。柱穴はほぼ円形で直径50cm～70cm、深さは遺構確認面から約45cmであった。東端の南北列は他と比較すると柱間が短いと（1.2m）から廊を支える柱であったものと考えられる。

検出された掘立柱の中には、柱穴の底に礎板や、木端材等を敷くものが確認されたものもあるが、これらのものが検出されない柱穴も多くあった。3D区SB23の柱穴には柱痕を囲んで根まき石（5cm×15cm程度の円盤7個）が置かれていた。根まき石が入っていたのはその1列のみである。

掘立柱建物は、56年度、57年度二ケ年の調査で33棟程が確認されたわけであるが、調査区域外におよぶ建物も多く、遺跡全体ではさらに多くの建物があったことが推定される。建物の時代的な評価については、板瓦遺跡が古墳時代初頭から奈良時代、平安時代を中心とする遺物が出土する複合遺跡であることを十分踏まえ、主軸方向における分類及び、建物の性格など慎重に検討していきたいと考えている。



第9圖 SB25実測図



第10圖 SB26実測図

竪穴状遺構

竪穴状遺構として2B区S I 30があげられる。長径5.0m×短径4.7m程の不定形の遺構である。壁高は4～6cm程で、底面はほぼ平坦であった。北側部分では遺構の外にかけて灰層(厚さ1～2cm)が堆積していたが、竈等の遺構は検出されなかった。遺構内には3m×1.5mの範囲に奈良時代前半の須恵器を伴う土師器の甕を中心とする破片が集中して出土している。

竪穴住居跡は2F区の北側発掘限界線にそって3棟並んで検出された。

S I 33は東西3.5mである。壁高は7cm～13cmであった。S I 34は東西5.8mで壁高は約10cmである。S I 35は東西2.7mで壁高は約9cmであり、坏蓋硯や墨書土器「日根駅家」(第19図一1)が出土している。

以上の3棟はいずれも北側部分が調査区域外にのびるため全体の規模は確認されていないが、覆土はいずれも木炭、有機質を多量に含んだ暗灰色粘土層であった。奈良時代後半の土器が出土していることから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。3棟のさらに東側で竪穴住居跡と考えられる遺構が検出されたが(S I 36)、ほとんどが発掘調査区域外になるため断面のみの調査にとどまった。この遺構からは土器が一括して出土したがその中に墨書土器「駅長12点(坏・第19図一6)。「駅富」(高坏・第19図一4)1点が出土した。

これらの竪穴住居跡は、出土した墨書土器から「駅」に関する付属施設である可能性も考

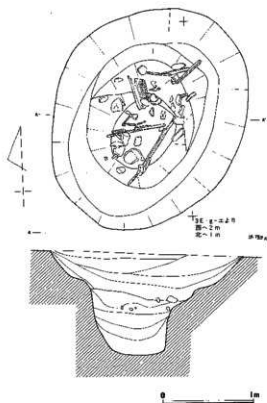
られ、整理作業の中で十分な検討をかさねたいと考えている。

(3) 平安時代以降の遺構

平安時代以降の遺構としては井戸状遺構として3E区S I 38、2C、D区の円形柱穴列(S B 34)。南北方向にわたるやや幅のせまい溝状遺構等が検出されている。

2C、D区にまたがって検出されたS B 34は柱穴が円形に9本並んだ直径3.5m程の遺構である。柱穴の直径は20cm程で、製土は茶褐色粘土層であり粘性の強い暗灰色の柱痕を持っている。円形柱列の性格については今後検討したい。覆土の状況から中世以降の遺構と考えている。

S I 38は3E区で検出された井戸状遺構(第11図、図版4ー1)である。3E区を北西から南東へ



第11図 S I 38実測図

流れる溝SD24(古墳時代後期～奈良時代後半)の南岸を切って造られた遺構である。長径2.5m短径2m程の楕円形である。遺構確認面から底部までの深さは約90cmであった。断面の形状は深さ約35cmまではゆるやかなすり鉢状を呈し、段を持っている。これより下半はほぼ垂直に掘られ底部に達する。底部は直径約50cm程の楕円形である。Ⅱ層より掘り込まれ、上層は鉄分を含んだ赤褐色層であり炭化物を多量に含んだ層が互層となっている。中層は焼土、炭化物を含んだ暗灰色粘土層であり、下層は種子、木葉などの有機質を多量に含んだ暗灰色粘土砂層であった。暗灰色粘土層及び灰色粘土層の覆土中からは、木杭、木製品の編台等が20cm～30cmの深と共に捨て込まれた状態で検出された。土器の出土は少なかったが山形茶碗が数点出土している。

底部には曲物、井戸枠などの施設は見られず、また浸水層の砂層まで至っていないことから井戸としての機能を十分果たしていたか疑問な点もあり、今後さらに地質、地形等の面で検討していきたい。

第2節 遺物

(1) 古墳時代の遺物

本項では、古墳時代の土器についてその概略を述べたい。

古墳時代の遺構は、調査区のほぼ全域で検出されている。概して調査区中央より西にかけて濃厚といえ、古墳時代の各時期の土器が出土している。第2次調査概報(袋井市教委1982)に従って、Ⅰ期4世紀、Ⅱ期5世紀、Ⅲ期6世紀、Ⅳ期7世紀前半に大別することができる。今回の調査では、5世紀及び6世紀前半代の良好な一括資料を得ることができた。

本項では、2B区から一括して出土したSD19の遺物についてふれてみたい。

SD19については第2章1)ですでに述べたが、幅2.5mの溝約5mに渡りほぼ同一レベルで須恵器環、坏蓋、土師器の坏、高坏、碗、甕、壺等が出土した。坏類は完形又は残存率の高い個体が多く見られるが、甕、壺類は残存率が全体的に低いようである。(第1表)

須恵器

坏蓋(第12図1～7) — 口径12.9cm～14.8cm、器高4.5cm～5.7cm

天井部には幅広く回転へう削り調整が施されてほぼ扁平な天井部を呈する。口径に対し器高の割合が大きい。天井部と体部との境の稜線が明瞭なもの(1～5)と、やや不明瞭なもの(6、7)とがある。

口径に対し器高の割合が大きく、天井部が箱型を呈するa類(1～5)、口径が小さく天井部に丸味をもつb類(6、7)に大きく二分される。

a類は天井部と体部との境に明瞭な稜をつくり出し全体に受け部が高く垂直に立ちあがる。その中でも、ほとんど垂直に立ちあがるもの(1、4)は、天井部が回転へう削りにより平坦に整形されるが、口縁部端部がやや外反するものは天井部が丸味を持つ傾向にある。いずれも口唇部内面にへう状工具による沈線有するがシャープさに欠ける。b類は天井部が丸味を帯び、口径は13cm以下と小型である。a類に比べ受け部が短かく、口唇部が外反する。胴部の稜



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



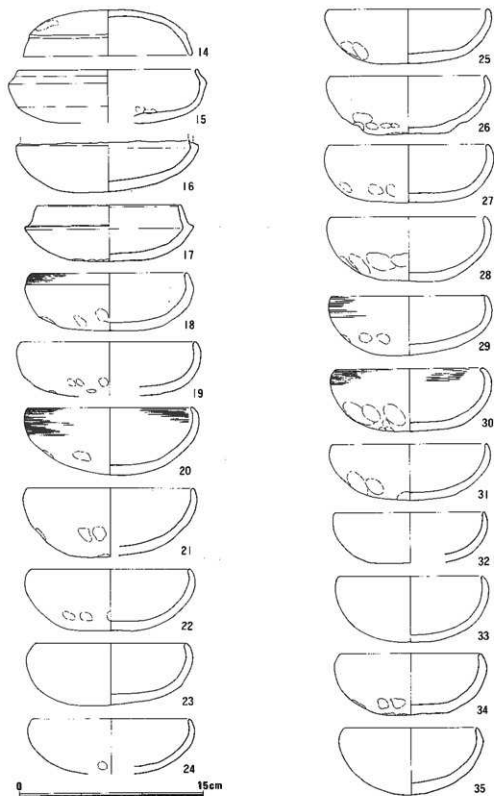
12



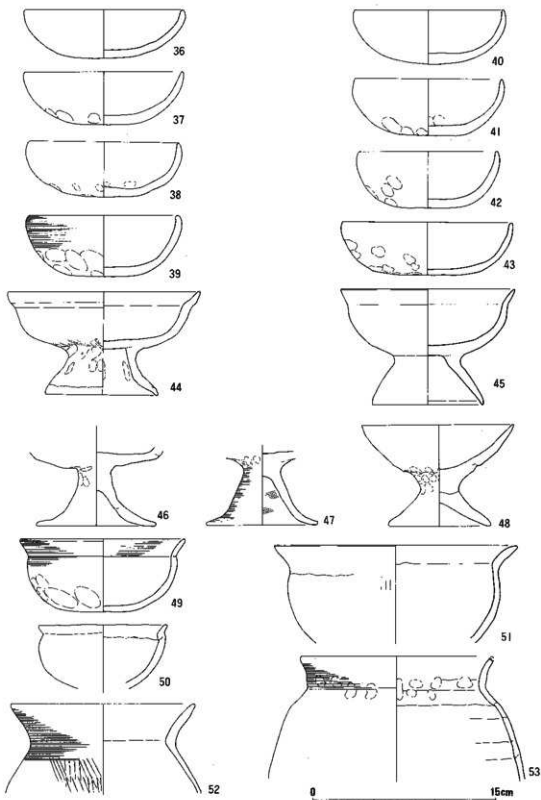
13



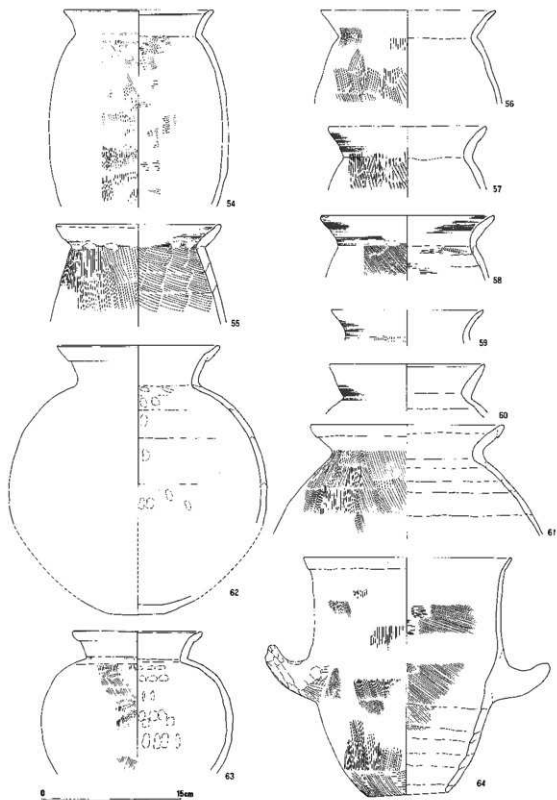
第12图 S D 19出土器实测图(1)



第13图 SD19出土土器实测图(2)



第14圖 SD19出土土器実測図(3)



第15图 S D19出土土器实测图(4)

及び、口唇部の沈線が不明瞭となり新しい要素を有する。

坏身（第12図8～13）—口径11.3cm～12.8cm、器高4.5cm～5.9cm

全体に受け部の立ちあがりが高くほぼ垂直なもの（8、11）と、やや内に傾く口唇部の内面の沈線を作り出すもの（9、12）と不明瞭なもの（8、10、11）がある。

口径がやや大きく、底部が平坦な時期的に古いもの（8～11）をa類とし、口径が12.5cm以下で底部が丸味を帯びる新しいものをb類（12、13）とすることができる。

坏蓋の（1）と坏身の（8）は、セット関係にあり、いずれも生焼けといわれる灰白色を呈している。又形態的には、坏蓋（4、5）は坏身（9、10）と対応し、坏蓋（6、7）は坏身（12、13）と対応するものと考えられる。

土師器

坏蓋（第13図14）—口径13.7cm、器高3.7cm

坏蓋は1点のみの出土である。受け部から体部境の稜は不明瞭であり、受け部口唇部は外に開いている。表面剥離が著しく調整技法は見ることができない。須恵器の坏蓋を模したものであろう。

坏身（第13図15～35・第14図36～43）—口径10.5cm～14.1cm、器高3.9cm～5.4cm

坏身は出土点数が多く、復元実測を含め29点を図化することができた。大きく分けて、受け部と体部との境に稜を有し、いわゆる模倣坏身と呼ばれるものをa類（15～18）とした。口唇部が体部より立ちあがりつつ大きく内湾するものをb類（19～35、36～43）とした。b類の中には、口唇部が体部より内湾せずに立ちあがるもの（36、37、43）がみられる。

a類は受け部の立ちあがりが高く、受け部の稜が明瞭に造り出されているもの（17）と受け部の立ちあがりが小さく、稜が不明瞭なもの（15、16）がある。（17）は遠考研編年Ⅲ期前葉の須恵器と同形態をなすものであり、受け部のナデ調整及び底部周辺から体部下半にかけて指頭痕が顕著に残る。焼成は非常に良く、胎土は緻密で表面剥離は見られない。

b類はいずれも最大径を口唇部より下半の胴部に持ち、口唇部が体部から口縁部へかけて強く内湾するものである。口径が小さく小型のもの（33～35）は一応に口径に対し器高の割合が大きい。（36～37、43）は口径に対して器高の割合が小さく、体部から口唇部へかけての立ちあがりがほとんど内湾しないものである。（39）は表面剥離が少なく、口唇部から体部中程にかけて、ていねいなナデ調整を行い、その後で底部周辺から体部中程にかけて指頭による整形を行っている。いずれも明赤褐色を呈し、胎土は緻密であるが表面剥離が著しく調整痕が確認できないものがほとんどである。調整痕の確認できるものとしては、口唇部のナデ調整を強く残すもの（20、29、30）がある。また、底部周辺から体部下半にかけて指頭による整形痕が顕著に残るものが多い。底部については、扁平に安定された平底のもの（19、22、25～27、37、43）と底部に丸味があり座りが悪い丸底のもの（20、29、33～35、38、40、42）とがある。

高坏（第14図44～48）—口径12.0cm～15.3cm、器高8.1cm～9.3cm

高坏は土器集中地点により一括出土した（46、47）がある。（44、45、48）は他の遺物とは共伴せず土器集中地点より8m程南で単独で出土したものである。（46、47）は、口唇部が外

へ開き、脚部を坏底部にさしこんで接合するもので接合部に指頭痕が顕著に残る。(46)は坏部と口縁部との境に稜を有する。いずれも脚部が「く」の字型に折れ曲るものである。

(44、45)は坏部を脚部に輪接合するものであり、体部より口唇部に立ちあがる口縁が段を有し口唇部は外反しつつ開いている。(48)は(44、45)と一括で出土した高坏で、口縁部がまっすぐ外へ開き脚部を坏底部にさしこんで接合するものであり、(44、45)の高坏とは時期差がうかがえる。

碗(第14図49~51) 一口径10.2cm~19.5cm

いずれも口唇部を外反させ、体部と口唇部との接合痕が認められる。(49)は口径13.5cm、器高6.0cm、完形。口唇部及び体部にナデ調整が見られ、体部下半には指頭痕が顕著である。底部は平坦で安定している。(50)は口径23cmで小型である。(51)は口径で19.5cmで大型であり、表面剝離が著しく調整は不明である。

甕(第14図52、53・第15図54~60) 一口径15.0cm~20.6cm

頭部が「く」の字状に屈曲し、外反する口縁部を有する。いずれも胴部はやや丸味を持つが、(55)はほとんど丸味を持たない。表面剝離が著しく、調整痕を見ることができないものもあるが、(54、55、58)は胴部内外にハケ目調整が施され、口縁部にはナデ調整が見られる。(52)は煤の付着が認められる。(53)は火を受けた跡があるが、表面剝離が著しく調整痕は認めがたい。(54)は口径16.2cm、推定器高約26~28cmと考えられる胴長の甕である。胴部内外面にはハケ目調整が施され口縁部にはナデ痕が残る胴部下半に煤の付着が認められる。(55)は胴部最大径が他の甕と比べ下位にくるもので胴部に丸味を持たず、口縁はまっすぐ外に開いている。口縁部の一部に煤の付着が認められる。(56)は胴部全体に煤が付着する。(57)は焼成が良好で胴部外面にハケ目調整が顕著に残る。(58)は口縁部中位が厚く、口唇部が外反する。胴部に煤が付着している。(60)は全体に厚手であり、口唇部は外反せずまっすぐ外に開く甕である。

壺(第15図61~63) 一口径13.6cm~20.6cm

球形の胴部を有し、やや立ちあがりぎみの頭部から口縁部は外反する折り返し口縁を有するもの(62、63)と丸味を帯びた胴部から外反する折り返し口縁を有するもの(61)がある。(62)は表面剝離が著しく調整痕は見られない。平底を有する。(63)は(62)と同形であるが胴部にはヘラ調整が施され、頭部、口縁部はナデ調整が見られる。

甗(第15図64) 一口径22.4cm、器高25.8cm

ややふくらみを持った胴部に折り返し口縁を有する甗である。胴部中位に把手を接合させるが把手には指頭痕が顕著に残る。胴部下半よりすぼめるようにして端部を仕上げている。体部内外面及び把手接合部にはハケ目調整が施されている。

以上S D19出土土器について概略を記したが、須恵器坏では古いタイプ(坏-a類)と新しいタイプ(坏-b類)が認められる。しかし、土器の坏については形態的差異は強いて感じられず、ほぼ同時期の形態と考えられる。第14図(44、45、48)をのぞけば、高坏、碗、甕、壺とも同時期の廃棄であり、遠考研編年のⅢ期前葉、(6世紀初頭)に対応するといえよう。

② 奈良時代の遺物

土 器

本項では2D区SD20より一括出土した土器について概略を述べたい。

2D区SD20については第2章②ですでに述べたが、幅約2.7m程の溝よりほぼ同レベルで土器群が集中して出土した。

須恵器

無台坏身(第16図1～8) — 口径15.5cm～14.2cm、器高4.2cm～4.8cm

体部に顕著なノタメ痕を有する碗形の坏である。底部をへう切りしたあとでナデ調整を施し、底部から体部にかけてふくらみながら口唇部へと立ちあがるa類(1～4、6～8)、底部及び底部外周を回転へう切りを行い、底部下半はふくらみを持ち体部中位から口唇部へかけてそりながら外反するb類(5)とがある。

a類には口唇部が体部からそのまま開いていくもの(2、6、8)と口唇部が強く外反する(7)とがある。a類では体部に強い回転ナデ調整が用いられている。底部はへう切り離しのあとナデ調整を施しているが、へう切り痕を顕著に残すもの(2、3)もある。

b類(5)は底部及び底部外周に回転へう切り痕を残すものである。

有台坏身(第17図32～42) — 口径13.5cm～15.3cm

体部に顕著なノタメ痕を有し、底部外周に高台を持っている。底部中央が高台とほぼ同じ高さか、高台より下方に張り出し、底部の器厚が中心に近くなるに従って8mm～11mmと厚くなるものをa類(32～34、36、39、40)とした。b類は底部が平底を有するもので、底部の器厚が5mm～4mmと薄いもの(37、38、41、42)である。

a類は、全体に底部から体部下半への屈曲がなだらかで稜をもたない傾向にある。体部に丸味を有するもの(32)、胴部が口唇部にかけて外反していくもの(39、40)がある。灰白色で焼成のあまり良くないもの(32、33、40)も見られる。

b類は、底部と体部との境に断面三角形の稜を有するものである。いずれも胴部がほぼ真すぐに開いて口唇部にいたるものであるが、口唇部端部がわずかに外反するもの(38)がある。

蓋(第17図17～31) — 口径14.7cm～17.1cm、器高2.7cm～4.2cm

天井部全体に丸味を持ち、天井部の約2分の1に回転へう削りを残している。口縁部までノタメ痕の残る強いナデ調整が施されている。いずれも背の低い扁平な擬宝珠形のつまみを有するが、やや大きめで立ちあがった扁平のつまみを有するもの(19)もある。

天井部下半にそり返りを行す(17～19、24～26)と、そり返しの見られない(20、21)がある。口縁部の受け部外周に強い回転ナデ調整を施すものが多いが(21、22、26)は施されていない。口縁部の受け部にはほぼ真下にのびるもの(20)、外下方にひらくもの(17、21～23)、内上方に屈曲するもの(26)がみられる。(27)は口唇部の端部が外反して強く屈曲し、沈線を有するものである。(31)は、天井部にわずかなふくらみを持ち、天井部全体に回転へう削り調整を施し、扁平なつまみを持った蓋である。縁部は内外とも、ていねいな回転撫で調整を施し、垂直につけられている。短頸蓋の蓋である。

壺（第16図10、11）

（10）は口径9.4cm、器高12.2cmである。最大径を胴部中位にもち、背の低い直立した短い口縁を有する肩の張った壺である。高台は幅が厚く、外に張り出している。体部下半は回転ヘラ削りによって整形され、内面には強いナデ調整がみとめられる。高台外面及び高台の底は横ナデ調整が施されている。沈線の入る口唇部はわずかに外反させている。底部はヘラによるナデ調整がみられ、中心部に板状工具によるかき取り痕が残る。肩部より胴部中位に暗緑色の自然釉がみられる。残存率約2分の1である。葉巻型の土器である。（11）は口径10.4cm、器高14.4cmである。最大径を胴部上位にもち、背の低い頸部を有する。底部から体部中位にかけて回転ヘラ削り調整が施され、体部中位から頸部まではノタメ痕を顕著に残すナデ調整がみとめられる。口唇部は下方に下がり、外反している。底部は平底で回転ヘラ削り調整がみとめられる。残存率は約2分の1である。

土師器

有台坏身（第16図12）一底径11.4cm

口縁部分を欠損する。底部からほぼ真すぐに開く体部を有し、体部には指頭痕がみられる。内外面いずれも丹彩が施されている。外に張ったやや高めの高台を有する。

皿A（第16図16）一口径15.5cm、器高2.3cm

外に向かって大きく開く口縁を有し、内外面とも丹彩が施されている。

皿B（第16図13～15）

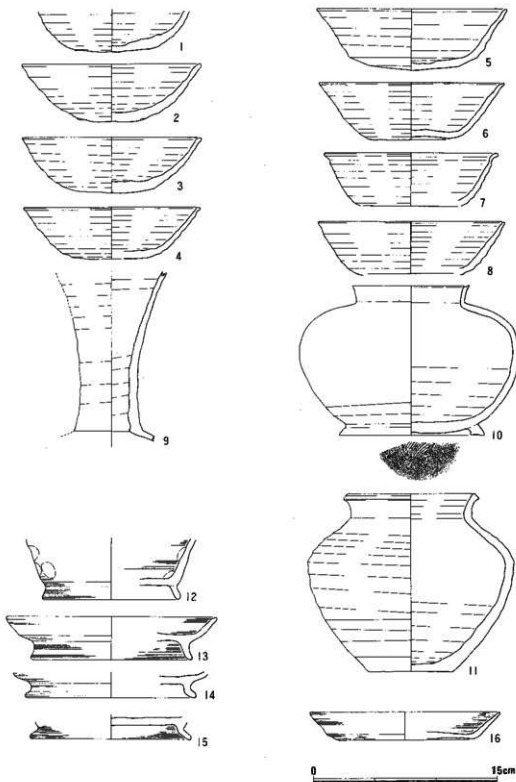
（13）は口径17.2cm、器高3.5cmを測る高台を有する皿である。体部下半にふくらみを有し、体部はほぼ真すぐに口縁へと開いている。外にやや外反する背の高い高台がつけられている。

（14、15）はほぼ同形態である。高台は外へ強く外反するものがつけられている。（14）は底部に指頭痕を見ることができる。いずれも内外面に丹彩が施されている。

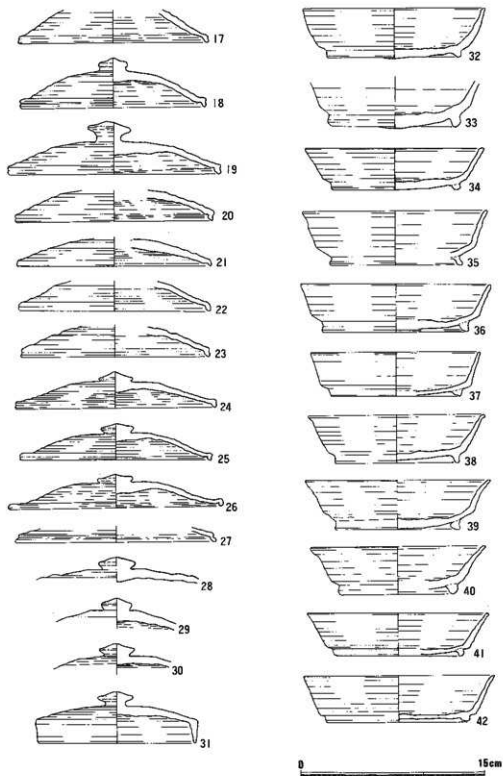
甕（第18図44～51）一口径19.7cm～37.0cm

口縁部が頸部のところから大きく屈曲し、横にねた状態になっている甕である。頸部がいくらか立ちあがり、口縁部下半で強く屈曲し口縁部がほぼ水平にねた状態で開くもの（45～49）と頸部が明瞭でなく、口縁部がわずかに立ちあがりながら外反し外へ開くもの（50、51）がある。いずれも頸部に明瞭な接合痕を残し、接合部が2cm～3cmにもなるもの（47、50、51）がある。また、口縁部端部にわずかながらも接合痕がみとめられるもの（46、47、49）もある。頸部から口縁部にかけてはナデ調整がみられ、胴部外面にはハケ目調整が施されている。内面についてもハケ目調整が施されているが、表面剝離が著しく確認できないものもある。口縁部の内面はナデ調整が施されているものがほとんどであるが（45）のようにハケ目調整のものもある。

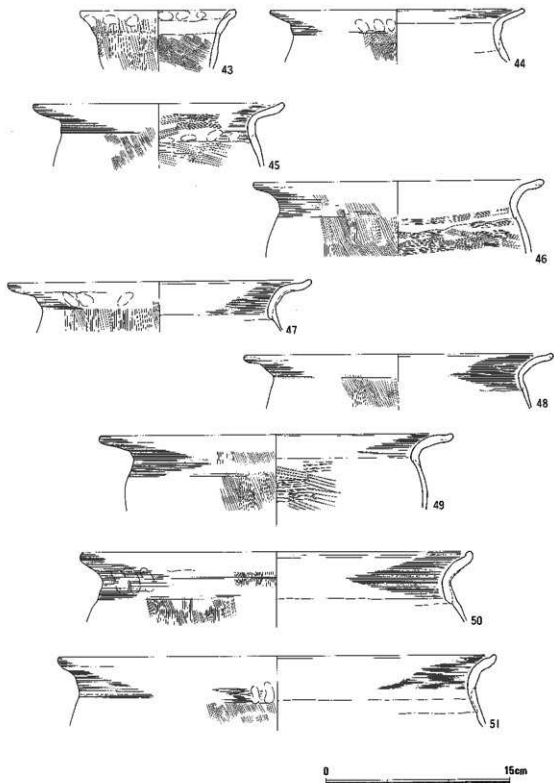
口唇部の端部は丸くおさめられているが、口唇部のすぐ内側にナデによる沈線を持たせ、端部を内湾させるもの（47～51）がみられる。頸部には体部と口縁部を接合した際につけられた指頭痕がみられるものが多い。



第16图 S D 20(出土土器実測図(1))



第17图 S D 20出土土器实测图②



第18图 S D 20山土器实测图(3)

鉢（第18図43）—口径12.6cm

胴部から口縁部にかけて開き、口縁部は外反している。口縁部は折り返しがみられ、口縁部内外には指頭痕が顕著にみとめられる。胴部内外ともハケ目調整が施されている。

(3) その他の遺物

昭和56年度の第2次調査では金属製品として主に次のものが報告されている。

「和同開珎」3点。「松」の印字のある方約3cmの「銅印」1点。重さ約82gの「分銅」（八角形十六稜）。鈔幣具（丸柄2点、丸柄裏金1点、鈔具1点）計4点。その他の特殊遺物として須恵器の「人形顔部」、「管玉」2点、「木簡」2点などがある。（1982 袋井市教育委員会）本項では57年度調査で出土した土器以外の遺物のうち主なものについて概要を述べたい。

勾玉—2 A—h 区Ⅲ層より遺構に伴わず単独で出土した。3.5cm×1.9cm、径0.2cmの穴がある。硬玉製、暗緑色である。

管玉—3 D g エ 区の溝より出土。滑石製で、直径約0.6cm長さ約0.3cmを測り直径0.1cmの穴がある。

鉄剣—3 D 区 S I 37より東へ80cmの位置で単独出土。切っ先部分を欠損するもので錆化が著しい。現存の長さ43cm程であり、柄の部分上面に5条のきざみがみとめられる。直刀と思われる。

皮袋型土器（図版6—5）2 B—b、S I 30より出土。土師器。幅約8.3cm高さ約4.4cm口径約2.5cmを測る。左右にバランスを持たせていねいなつくりである。底部は平底で口縁部に頸部を接合した時の接合痕がみられる。

鈔幣具（図版6—4—6）(6)は巡方の裏金である。2.75cm×1.8cm。四隅に銚を打つための穴があげられている。2 E 区 S D 24より出土。(4)は(5)と組み合わせられて出土している。(5)は2.61cm×1.93cmを測り銚が2本付いている。(4)は2.61cm×1.98cmを測るが隅の部分が破損している。

鉄斧—3 F 区 S D 24より2点出土している。8.4cm×4.1cmのものと8.3cm×5.9cmを測るものである。全体に錆化が著しく形状が明らかではないが柄をはめ込む部分の鉄板を曲げてある。

鋤（図版6—2）(2)の鋤は31.8cm×13.7cmでほぼ中央部で厚さ1.2cmを測る。大きいえぐりが入れられ、鉄板などを接合させて使用したものである。中心部に3.0cm×2.0cm程の穴があげられている。先の方は厚さが薄くなっていく。柄の部分は偏平である。2 D 区 S D 21より出土。鋤は2 D 区 S D 21よりもう1点出土し、34.8cm×12.0cmを測る。柄の部分は断面が円形で直径約3cmを測る。鋤先端部とその周辺に破損がみられる。

木簡（図版6—1）第3号「 □□□ 」19.7cm×2.7cm×0.2～0.3cm

2 D 区 S D 21より出土したもので完型である。上端の左右に切り込みがあり、先端部分はとがらせてある。暗褐色を呈するため墨書の見識はできない。

第3章 ま と め

一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）の名栗、北原川地区にかかわる板瓦遺跡の発掘調査は、今回の第3次発掘調査をもって終了した。国道1号線をはさんでの第2次、第3次発掘調査

査は、坂尻遺跡を東から西へ帯状に細長く調査したことになり、調査範囲は約8,000㎡であった。調査範囲は坂尻遺跡全体のごく一部ではあるが、遺跡を解明する上で多くの成果をあげることができた。これらの成果は本報告にゆずることになるが、ここでは第3次発掘調査で得られた成果について概略を述べたい。

- 1) 古墳時代の遺跡及び遺物の広がりには調査区の全域に及ぶことが確認され、4世紀代から7世紀代に及ぶ各時期における遺構の状況を今後検討することで古墳時代の様相がかなり明らかになるものと考えられる。S字Ⅱ線を有する古式土師器の広がりへの検討も必要であろう。古墳時代前期の土器(和泉期)の良好一括資料(SD23)の検出は、この時期の土器の組成及び編年を明らかにする手だてとなる。

古墳時代後期の遺構からも良好一括資料を得ることができた。これらの溝状遺構(SD19、24)では土器の出土状況などから祭祀的色彩を強く感じることができる。

古墳時代の各時期を通じて堅穴住居跡の良好な遺構が検出されなかったこと、溝状遺構などでは祭祀的色彩が強いことなどは、地方における官衙の成立時期を考える上で、また遺跡の性格を知る上で注目されるものである。

- 2) 奈良時代の遺構としては、新たに18棟の掘立柱建物群が確認され、第2次調査で確認されているものと合わせると計33棟を数える。郡衙の成立時期を考える上でも掘立柱建物の時代的位置づけは重要であるが、坂尻遺跡が古墳時代から平安、中世まで続く複合遺跡であることを十分踏まえて慎重に検討を重ねていく必要があるだろう。

2E、F区より検出された堅穴住居跡については、いずれも遺構が調査区域外に広がるため十分調査ができなかったが、坂尻遺跡を語る上で重要な資料を提供した。特にここから出土した「駅」に関する墨書土器を含む一括資料は、これらの堅穴住居跡の性格を明らかにするだけでなく、古代駅制のあり方を示唆するものとなる。

- 3) 坂尻遺跡は、第2次、第3次発掘調査により検出された数多くの掘立柱建物群及び鈴帯具、分銅などの特殊な金属製品の出土と2I区の溝状遺構で「×野厨」の墨書土器が出土したことから官衙跡の可能性が問われてきた。第2次発掘調査の遺物整理作業中さらに3C区の井戸状遺構から「佐野厨家」の墨書土器が見つかったことで、「和名抄」に見ることのできる「佐野郡」の郡衙跡と考えるべき遺跡であろう。また墨書土器の「日根」「日根人」が多数出土したが、この「日根」は佐野郡に存在した日根郷と考えられることから、佐野郡衙跡であることを示唆している。

「駅」に関する墨書土器の出土も8点を数え、「駅家」の存在も佐野郡衙とのかかわりの中で十分な検討が必要である。「和名抄」に記載されていない、日根駅家、水鉢口駅などの意味することについてもさらに検討を深めていきたい。

- 4) 坂尻遺跡の出土遺物、特に消費地における土器についての編年の課題としては近隣の土器生産地としての遺跡(湖西市古窯跡群、大須賀町清谷古窯跡群)とのかかわりについても検討することが必要だろう。郡衙成立時期については、「続日本紀」養老6年(722年)の山名郡分立以前に佐益(野)郡衙が成立していた可能性もあり出土土器の編年など

からも十分な検討が必要であろう。

第2表 掘立柱建物遺構表 (SB)

番号	位 置	形 状	間口規模	主軸方向	時 期	備 考
16	2A-h	2×2	1.6×1.8	N 3°00'W		総 柱
17	2B-d・e	3×?	2.0×1.6	N 5°00'W		総 柱
18	2B-c・f	2×?	1.4×?	N15°00'W		総 柱
19	2C-b	2×2	1.3×1.2	N13°30'W		総 柱
20	3D-a	7×3	2.1×1.3	N 3°00'W		総 柱
21	3D-a・d	2×2	2.2×1.9	N 9°00'W		
22	3D-e	2×?	2.3×?	N 9°00'W		総 柱
23	3D-d・g	2×?	2.2×?	N 2°30'W		
24	3D-g	3×3	1.6×1.7	N11°30'W		
25	3D-g、3E-a	4×?	1.9×2.2	N 7°00'W		
26	3D-g	4×?	1.8×1.6	N 7°30'W		総 柱
27	2E-c、3E-a	2×?	1.7×1.3	N 3°00'W		総 柱
28	3E-g	2×2	2.2×2.4	N32°30'E		総 柱
29	3E-g、3F-a	2×2	1.6×1.8	N23°30'E		
30	3E-g	2×?	1.7×1.4	N 6°30'E		
31	2F-a	3×?	1.3×1.3	N 5°00'E		総 柱
32	2F-d・g	3×?	1.3×?	N 4°00'W		総 柱
33	3D-h	3×?				総 柱
34	2C-h、2D-b	円形柱列				

第3表 竪穴状遺構表 (SI)

番号	位 置	形 状	規 模	主軸方向	時 期	備 考
30	2B-b・c	不定形	5.0×4.7	N16°30'W	奈良	
31	2C-g・h	楕円形	2.5×2.0	N 6°30'W	古墳前	
32	2D-d・g	楕円形	3.2×2.2	N51°30'E	古 墳	
33	2E-g、2F-a	隅丸方形	3.5×?	N 9°30'E	奈良	住居跡
34	2F-a・d	隅丸方形	5.8×?	N 1°30'W	奈良	住居跡
35	2F-d・g	隅丸方形	2.7×?	N11°00'W	奈良	住居跡
36	2F-g、2G-a	隅丸方形	4.0×?	N 6°30'W	奈良	住居跡
37	3D-d	隅丸方形	6.4×?	N 8°30'W	古 墳	住居跡
38	3E-g	楕円形	2.5×2.0	N17°30'E	中 世	井戸?
39	2E-i	隅丸方形	0.76×0.7	N33°30'E	古 墳	

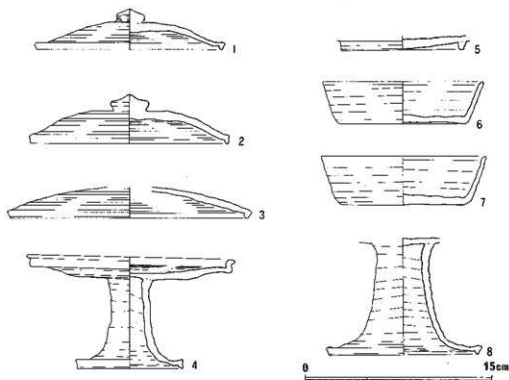
第4表 溝 状 遺 構 表 (SD)

番号	位 置	規 模	主軸方向	時 期	備 考
18	2A-h・i、2B-b・c・e・h 2C-b・e・g・h	1.5~1.8	N25°~80°E	奈 良	
19	2B-b・c・f	2.0~2.5	N18°W	古 墳	土器集中、祭祀
20	2D-g・h	2.4~3.0	N 4°W	奈良前	
21	2E-d・g	4.8~5.2	N54°W	古墳後奈良	小竈、竈先、 SD2に接続か
22	3D-d・g・h	2.0~2.4	N28°W	奈良前	SD20と接続か
23	3E-a・d・e	1.2~2.2	N 7°~48°W	古墳前	土器集中
24	2E-i、3E-g、3F-a・b	2.1~2.8	N43°~60°W	奈 良	
25	2C-g・h	1.4~1.6	N 0°	中 世	絹織物出土

(S1・SB・SDいずれの番号も56年度第2次概報の遺構番号と連番である。)

参 考 文 献

1. 1966 遠江考古学研究会「大沢、川尻古窯調査報告書」
2. 1978 川江秀孝「静岡県下出土の須恵器について」『静岡県考古学会シンポジウム2』
3. 1981 岐阜市教育委員会「老洞古窯跡群発掘調査報告書」
4. 1971 浜松市遺跡調査会「伊場」第4次調査月報2
5. 1980 浜松市教育委員会「伊場遺跡遺物編2」「伊場遺跡発掘調査報告書」2
6. 1981 藤枝市教育委員会他「日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-奈良・平安時代編」
7. 1979 静岡県教育委員会「静岡県道跡地名表」
8. 1981 袋井市教育委員会他「一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書-板尻遺跡第1次調査概報」
9. 1982 袋井市教育委員会他「一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書-板尻遺跡第2次調査概報」
10. 1958 平安学園考古学クラブ「船橋1」「船橋Ⅱ」
11. 1975 浜松市教育委員会「伊場遺跡第6・7次発掘調査概報」
12. 1971 杉原莊介・大塚初重「上師式土器集成」



第19圖 墨書土器実測図

	図版番号	釈 文	墨書部位	出土遺構
第19図一 1	8-30	口根柳家	坏蓋内	S I 35
2	8-27	市	坏蓋内	S D 24
3	8-31	大上口跡柳家	坏蓋内	S D 18
4	8-26	柳富	高环底	S I 36
5	8-32	佐野野家	坏身底	S I 13
6	8-25	柳長	坏身底	S I 36
7	8-24	柳長	坏身底	S I 36
8	8-29	一年水鉢 柳	高环底	S D 24

a
B-39 竹寸殿(の)
B-40 口根大
B-49 大上日館駅家

b
B-48 口根駅家

c
B-41 駅長
B-42 駅長
B-43 駅富

d
B-47 山科

e
B-50 佐野婦家

f
B-32 東家

g
B-44 市
B-45 板井
B-46 三年水鉢 駅

h
B-1 東家 B-5 島津
B-2 女子 B-6 駅子
B-3 山科 B-7 有玉
B-4 日根 B-8 玉響長
B-35 十四

i
B-37 石田

j
B-36 駅

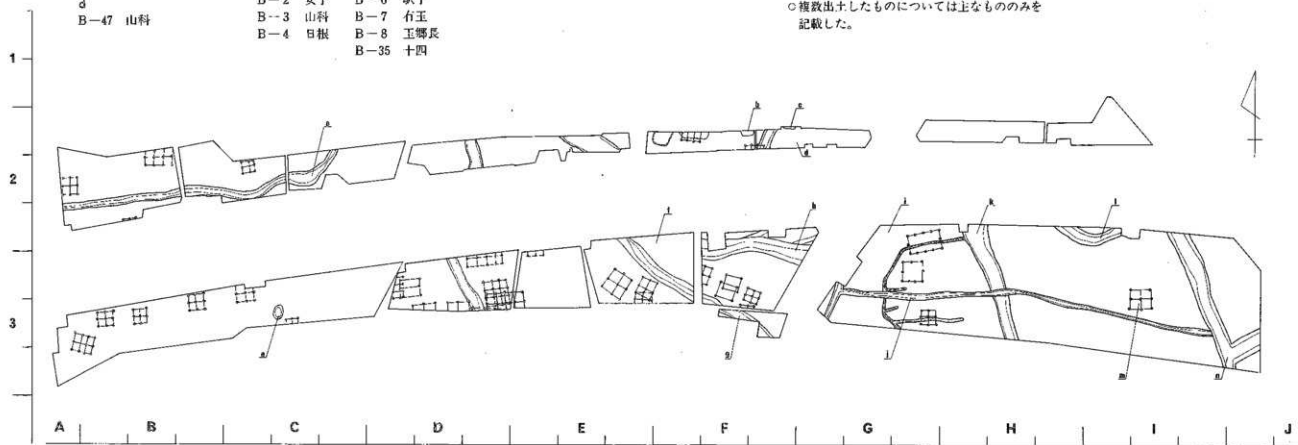
k
B-9 築刀
B-10 竹寸家
B-12 西田
B-31 子女

l
B-13 足 B-19 真 B-24 竹寸家
B-14 千山 B-20 宗 B-25 後家
B-15 沢 B-21 前玉 B-26 ×野野
B-16 島津 B-22 市
B-17 朽辺 B-23 浄主

m
B-38 人成

n
B-33 新家

○墨書文字のみを記載し、文字に付随した記号
(のしマーク等)は省略した。
○複製出土したものについては主なもののみを
記載した。



第20図 主要土器墨書出土地点全体図

(付 載)

坂尻遺跡出土の絹織物について

京都工芸繊維大学名誉教授

布 日 順 郎

(1) はじめに

坂尻遺跡第3次調査に際して、2C区SD25溝から織物の小片が多数発見された。昭和57年6月28日のことである。

この溝は幅約1.5—2mのU字溝で、掘り起こされた粘土の裏に織物片が付着していたのでさらに調べた結果、溝中の1個の礫(16.5cm×9.5cmの長方形に近い形をしている)の上と溝底の粘土とに跨って、約20cm四方の範囲に貼り付いた状態で、織物の小片が多数発見されたという。筆者が現地を訪問して織物片の付着している状態(図版5—1)を上から見たところでは、それぞれの織物片は、織密度がよく似ているように思われた。したがって、もとは一連の織物であった可能性が考えられる。

(2) 織密度、織糸、材質等についての調査

織物片の1つ(図版5—2)を拡大してみたところでは、織密度が1cm当たり経41本、緯32本の比較的細密な平織である。この密度は今日の羽二重に匹敵するものであり、一見絹を思わせるものである。しかし、織物面には絹特有の光沢はみられない(図版5—3)。また、織目のみられるのは片面だけで反対面には黒色の層があり、その層はきわめて薄く、織物自体の厚さの1/4から1/2程度とみられる(図版5—4)。この層は、あるいは漆であるかもしれない。もしそうであれば、この平絹は漆塗技法の1つである「布着せ」のためのものであった可能性が生じてくる。

織物の1部を切り取って緯糸方向及び経糸方向の切断面を作ったものが図版5—5・6であり、図版5—5には経糸の断面と緯糸の側面(彎曲している)、図版5—6には緯糸の断面と経糸の側面(彎曲している)があらわれている。経、緯糸の断面の中から良いものを選んで拡大したものが図版6—7・8である。上述の黒色物質は図版5—5及び図版6—7のそれぞれ下側、特に後者において明瞭にみられる。また、これらの図をみると、緯糸断面の両端にも、織目間隙を埋めるような形で何かが詰まっている状態がみられる。

経、緯糸の断面には、織糸を構成する繊維の断面が多数あらわれており、それら繊維断面の形は明らかに絹繊維のものである。すなわち、この織物は絹と判断される。

図版5—3をよくみると、織目の歪んだ箇所が若干みられるが、永らく溝に埋まっていた(最初のころは溝中を水と一緒にも流れることもあっただろう)ことを思えば、もとは織目の整ったものであったかと考えられる。この品を絹とみるべきか、それとも雑(あしぎぬ)とみるべきかについては異論もあろうが、筆者は絹とみたい。

織糸断面にみられる繊維数は、経糸で46本、緯糸で22本を数えることができた。このことから、経糸の際の繭粒付数はおそらく10粒を基本としていたものと思われる。実際には、緯糸に11粒分の生糸が使われているが、それは、10粒分の生糸を使うべきところを大ざっぱにやったために11粒付けになってしまったとみられ、また、経糸の場合は10粒繭りの生糸を2本合わせべきものが11粒付けと12粒付け、あるいは10粒付けと13粒付けを合わせてしまったものとみられる。

10粒付けを基本としていたと考える根拠は、橋忠兼の「伊呂波字類抄」に次のように記されていることによる。

「度の起こる所は忽に起こる。一蚕口に從つて出づるを忽と為し、十忽を一絲と為し……」

これは、10粒の繭から引いた糸を合わせて1絲となす。つまり、10粒付け繭糸を行なったことをのべたものである。「伊呂波字類抄」は12世紀後半頃の著作であり、上文に記すところは宋制に從ったものである。

絹織物にあっては、織糸の断面形が人眼状をなすのが普通で、碇打ち（これは、絹の光沢を増すと同時に柔かくする目的で行われる）を施した場合には、人眼状は潰れて扁平な形になる。図版5—5・6、6—7・8にあらわれている織糸断面の形からすれば、碇打ちは施されていないようにみえる。

(3) 繊維断面の調査とそれによる時代判定

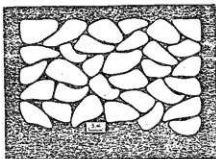
顕微鏡視野の中の繊維断面を Abbe 式描画装置を使って個々に転写したものを任意に配置したのが第1図と第2図であり、これら転写図から計測した繊維の断面完全度（繊維断面図上の最長径を直径として描いた円の面積に対する繊維断面面積の百分率を断面完全度という。わかりやすくいえば、断面形の扁平度をあらわしている）と断面積は第1表に示す通りである。

第1表によれば、断面完全度、断面積ともに経糸よりも緯糸において大きい。これらの値は、緯糸に比べて経糸の方が大きいのを普通とするが、この織物の場合は逆である。

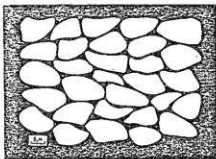
この遺構の年代は、伴出土器の形式から12—13世紀ごろと考えられている。そこでいま、経糸と緯糸における断面計測値の平均値を、第2表に示す平安時代及び鎌倉・南北朝時代のそれと比較してみると、第3表のようになる。すなわち、本遺跡の絹の場合は、断面完全度については平安、鎌倉・南北朝のいずれよりも小さな値である。ただし、両時代の値との差は、危険率5%以下の水準では、有意とはいえない。断面積については平安と鎌倉・南北朝の中間の値であり、この場合も両時代の値との差は、危険率5%以下の水準では有意性が認められない。

ここで問題となるのは、繊維の断面計測値によって絹の時代判定をしようとする場合に、断面完全度と断面積のいずれに、より高い信頼度をおくかということである。この点については、筆者の長年の経験から、断面完全度よりも断面積の方により高い信頼がもたれる。したがって、織物を構成する繊維の断面計測値による限り、この織物が作られた時代としては、平安時代と鎌倉・南北朝時代の中間のころを想定したい。

わが国絹史上、平安から鎌倉・南北朝へかけてのころの遺物がいたって少ないことを思えば、版元遺跡出土の絹は貴重なものといわなければならない。



第1図 経糸断面図



第2図 緯糸断面図

(4) その他

過去の例よりみて、絹の出土品はすべて墳墓からのもので、今度のように溝中から出た例は他にない。溝のみでなく、土中から出た例も聞かない。そうした意味において珍しい出土品といえる。

どうして溝のようなところにあったのかについては判断に苦しむ。溝の中を流れてきたとしても、何処から流れてきたのか、見当がつかない。したがって、この絹は何に使われていたのかということについても全く不明である。ただ、本遺跡のあたりには奈良時代初頭に郡衙が置かれていたと考えられており、掘立柱33棟の確認をはじめ、和同開珎3点、帯金具6点、分銅1点、銅印1点等が出土していること。そしてさらに、本遺跡が古墳時代から中世へかけての複合遺跡とみられていることなどから、古い時代には相当長年にわたって栄えた土地であったと考えられる。そのような場所であれば絹が出たとしても不思議ではない。

有機物である絹織物で800年近くもの間土中に残存しえたのは、礫と粘土の間、あるいは粘土の中にあったことと、片面に漆層らしいものが密着していたことのために、腐蝕の原因となる酸素から遮断されていたことによるものと思われる。

(5) 摘要

坂尻遺跡第3次調査の際に2C区SD25溝から半織物の小片が多数出土した。出土の状態、織目方向、織密度等からみて、それら織物片はもとは一連のものであったと思われる。

織物の材質は、構成繊維の断面形から、絹と判断される。

過去の例からすると、絹の出土品はすべて墳墓からのものであり、溝中から出た例は他にない。

この絹の織密度は現代の羽二重に匹敵し、砑打ちは施されていない。

繊維断面面積の値から、この絹が作られた時代は平安時代と鎌倉・南北朝時代の間のごとく想定される。

繊維断面計測値は経糸よりも緯糸において大きく、このことは通常とは逆である。

織目がみられるのは片面だけで、反対面は、黒色の物質（漆?）が薄層をなして一面に付着しているために、織目が消れてしまっている。黒色物質が漆であるとすれば、この平絹は漆塗技

法の1つである「布着せ」のためのものであった可能性が生じる。

織糸を構成する繊維の数からみて、繰糸の際の蒔粒付数は10粒を基本にしていたと思われる。わが国史上、この時代の遺物はいたって少ないので、貴重な出土品といわなければならない。

稿を終えるに当たり、調査の機会を与えられた袋井市教育委員会に感謝の意を表する。

第1表 坂尻遺跡出土の平絹とその組織についての調査

経緯の別	色	繊維横断面についての計測値			繰糸を構成する繊維の数	織密度 (対1cm)	経糸数と緯糸数の比
		完全度(%)	面積(μ^2)	供試繊維の数			
経	焦茶	45.5±2.64	59.7±4.99	32	46	41	1.28
緯	焦茶	48.9±3.19	75.1±6.89	30	22	32	
平均		47.2	67.4				

第2表 平安時代と鎌倉・南北朝時代における
絹繊維横断面計測値(平均値)

時代	断面完全度(%)	断面積(μ^2)	資料数
平安	56.3	79.5	6
鎌倉・南北朝	58.2	61.3	20

第3表 坂尻遺跡の平絹と平安時代及び鎌倉・南北朝時代の
絹製品とにおける繊維断面計測値の差の有意性検定

原資料	断面完全度	断面積	原資料
坂尻遺跡の平絹(2)	< 0.2	< 0.7	平安時代の絹製品(6)
"	< 0.1	> 0.6	鎌倉・南北朝時代の絹製品(20)

備考(1) < 又は > の下の数値は、危険率5%以下の水準では両平均値間に有意な差がないことを示している。この数値が大きいほど両平均値間の差は小さい。

(2) () 内の数値は資料数。

図 の 説 明

(図版 5—1)

粘土と礫に織物片の付着している状態(溝の地面を、織物のみられる範囲を含めて切り取ったもの)。礫の大きさは16.5cm×9.5cm

(図版 5—2)

織物片の1つ。scale: 1 mm

(図版 5—3)

前図の一部拡大。図面を横切っているものは、織物面に外から付着した材質不明の繊維。scale: 1 mm

(図版 5—4)

前図の反対面。scale: 1 mm

(図版 5—5)

織物の緯糸方向の断面。図には4個の経糸断面と、彎曲した緯糸の側面とがあらわれている。下方に黒色物質(漆?)の層がみられる。scale: 0.1mm

(図版 5—6)

織物の経糸方向の断面。図には3個の緯糸断面と、彎曲した経糸の側面とがあらわれている。scale: 0.1mm

(図版 6—7)

経糸断面の1つを拡大したもの。下方に黒色物質(漆?)の層がみられる。scale: 10 μ

(図版 6—8)

緯糸断面の1つを拡大したもの。scale: 10 μ

第1図 経糸繊維の断面転写図。配置は任意。scale: 5 μ

第2図 緯糸繊維の断面転写図。配置は任意。scale: 5 μ

文 献

袋井市教育委員会編「一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査報告書—坂尻遺跡第2次調査—」1982

拙著「養蚕の起源と古代絹」雄山閣、1979

堀忠兼「伊呂波字類抄」12世紀後半頃

貝洛「中國度量衡史」1966

坂尻遺跡第3次調査出土の土器墨書について

静岡大学人文学部教授

原 秀 三 郎

坂尻遺跡第3次調査において、現在までに確認できた土器墨書(土器に書かれた墨字)は、土器片の個体数で133点である。このうち1個体に2ヶ所墨書されたものが3点、転用硯が1点ある。今回出土の土器墨書は、第2次調査出土のものと内容上ほぼ同一の傾向を示しており、特に今回分類法を変更する必要を認めなかったので、以下の叙述においては前稿「坂尻遺跡出土の土器墨書について」(第2次調査概報所収)と同様、1役所名・職名等、2郷名・地名等、3人名等、4その他、の順序で、釈文作成過程での所見と若干の考察を加えたい。

なお遺物整理が4段階階にあるため、墨書と器形、あるいは出土地点や遺構との関連などについては、極く一部についてふれるにとどまざるを得なかった。したがって、以下の叙述が本報告のための予備的考察にとどまり、今後補足、訂正のありうることは、これまた前回と同様である。

1 役所名・職名等に関するもの 第2次調査においては、「×野厨」、「玉郷長」、「駅子」の3点が出土し、本遺跡の性格を推定する上で重要な手掛りを提供したが、最近になって、さらに第2次調査分の土器を整理中、「佐野厨家」(117)と墨書された土器片を検出した。これによって、本遺跡を佐野郡家の一部と見る説は一層強固になったといえよう。

佐野厨家とは佐野厨というに等しいと思われるが、やや改った表現のようにも思われる。厨家の初見は弘仁3(812)年12月15日、同28日の官宣旨にみえる太政官厨家(『類聚符宣抄』)とされているが(今泉隆雄「長岡京木簡と太政官厨家」『木簡研究』創刊号)、土器墨書としては本例が、管見の限りでは初例と思われる。厨家は、平安時代を通じて厨と併用されるが、時代のやや降った長元3、4年頃(1030~31)の作成とされる「上野国交替実録帳」(平安遺文4609号)では、郡家を構成する四要素、すなわち正倉・郡庁・館・厨家の一つとして、酒屋・備屋・龜屋・納屋の建物群を総称する概念として使われているほか、単なる台所を意味すると思われる厨屋と同じ意味にも使われている。今回、坂尻遺跡で出土した佐野厨家の墨書はそれが書かれている土器の型式から見て奈良時代前期に通る可能性があり、甚だ注目すべきものと言えよう。

第3次調査においては、直接郡家に関連する追加資料は出土しなかったが、新たに駅家関係のものが7点出土したほか、「市」(105)の墨書も出土し、注目すべき成果を得た。

今回出土の駅家関係の墨書は、「駅」(64)、「日根駅家」(115)、「駅長」(99・100)、「大上日請駅家」(116)、「三年水鉢 駅」(110)、「駅派」(101)の6種7点であるが、これに前回出土の「駅子」を加えると坂尻遺跡出土の駅家関係墨書は7種8点ということになる。

まず、釈文作成過程での所見を記しておく、「駅長」の2点は同筆の可能性はある。「口根駅家」については、第3字の旁のくずしの判読に若干疑問が残るが、駅と判読した。「三年水鉢 駅」の第4字鉢と第5字駅との間に1字分間隔を空けるについては疑問のむきもあるかと思われるが、三年水鉢まで一気に書いてきた筆がここで一息つき、やや方向を変えて駅と書いていとと看取できるので、それを1字明けて示した。

次に個々の墨書の意味の考察を試みよう。「口根駅家」については、このように判読することが許されるとすると、従来遠江国内では勿論、近隣諸国においても駅家としては全く知られていなかったもので、新史料ということになる。この点からも、駅家と判読するについては慎重でなければならないのであるが、しかし、口根駅家は古代の駅家名としてあり得ないものではない。

周知のように、伊場木簡中に、従来文献等では全く知られていなかった「宮地駅家」（三十号）の名がある。『和名抄』によると、参河国宝舛郡に宮道郷があり、また延喜兵部式および『和名抄』高山寺本駅名に渡津駅の見えることから（なお、同郡内には渡津郷がある）、奈良時代には宝舛郡内に宮地駅家が置かれていたが、後に廃されてその代りに同郡内に渡津駅が置かれたものと推定される（『伊場木簡』〈浜松市教育委員会〉は、宮地駅家の上方に書かれた「口駅家」は渡津駅かとしているが〈23頁〉、宝舛郡内に同時に2駅家が置かれていたとは考え難く、失考というべきであろう。この場合、某駅家は猪鼻駅家とみるのが穏当である）。

こうした事例を参考に推定を試みると、佐野郡内に日根郷があり、また既出の墨書の中に「日根」、「日根女」等の見えることから、日根郷に近接して日根駅家が駅家制度の成立当初に置かれたが、その後ある時期に廃されて、代りに横尾駅が置かれたということは十分あり得ることといわなければならない。前稿でも述べたように、延喜兵部式にみえる横尾駅については、掛川市市街地附近にあったとする説があるが、その決めてとなる証拠を欠く上に、さらにそれが奈良時代にまで遡るという確証は全くない。特に東海道においては、9世紀中葉の駿河国富士・駿河両郡に典型的に見られるように、交通量の急増にともなう交通手段の整備改変があり、8世紀の駅伝制と9世紀のそれとの間には相当大きな変化があったと見なければならないから（拙稿「古代駿河遠江両国の東海道」〈『静岡県歴史の道調査報告書—東海道—』総説I、静岡県教育委員会〉）、参河国の宮地駅家と渡津駅との関係を、日根駅家と横尾駅との間に見ることは十分可能なことといわなければならない。

日根駅家をこのような性格のものと推定すると、それはどこに置かれ、坂尻遺跡との関係はどのようなものであったか、という疑問が当然わき起こるのであるが、この問題については最後にとりあげることにする。

「駅長」と書かれた墨書は同一地点から2点出土したが、これは日根駅家の駅長とみて大過ないものと思われる。駅長は、麿牧令駅長条に「凡駅、各置_レ長一人、取_レ駅戸内家口富幹_二事者_一為之、一置以後、悉令_二長仕_一」とあるように、駅家ごとに一人、駅戸のうちから家口に富み、実務能力を有するものを任命した終身職であり、課役（調庸・雑徭）を免されていた（賦役令舍人史生条）。

「駅」の墨書は、1字で完結していたかどうか明らかではない。上部に文字のあった可能性は少ないが、下にはなかったと断定することはできない。

「大上日請駅家」は、一見文書風の墨書で、木簡の記載を思わせるものがある。管見の限りでは類例はなく、その意味も甚だ難解であるが、大を大領の略語と見れば、少なくとも次の二つの解釈が可能であろう。その一つは、「大の上日を駅家に請う」と読み、大領の上日（駅家に出動した日数）を報告するよう郡家から駅家に請求した文面と解する場合であり、もう一つは、「大上日す、駅家に請う」と読み、大領が上日（この場合は郡家に出動）したので、何事（物）かを駅家に請求したと解する場合である。

前者の解釈をとる場合、郡司四等官（大領・少領・主政・主帳）は国司の考課＝勤務評定を受けたから（考課令郡司条）、当然そのための資料として出動日数調べが必要であったと思われるので、郡家の管轄下にある駅家への大領の出動日調査は十分あり得たとみななければならない。とすると、この6文字が坏蓋の内側に書かれたのは何故であろうか。坏蓋は現在五つの破片に分かれているが、これを原状に復して考えると、坏蓋、あるいはその破片に右の6文字を書いて郡家から駅家（または駅長）に使が出されたという場合が想定されるのである。従来、土器またはその破片が料紙または木札と同様の役割をした事例は知られていないが、右のような想定が許されるとすれば、甚だ興味深いものといわなければならない。

後者の解釈は、請求の内容が文面上明らかでないという難点があるため、その成立の可能性は極めて小さいとみななければならない。ここでは、前者の解釈が新事例として影響するところ大なので、ありうべきひかえ日の解釈として例示したにすぎない。

いずれの解釈をとるにせよ、この墨書はその書き振りにからして習書とは見えないから、現実の意味をもった文書風の土器墨書と見ることに人々の異存はないものと思う。ただし右側に付されたかぎのての傍線の意味は合点と見るにはやや大きすぎ、不明といわざるを得ない。あるいは受け取った側で心覚えに記入したものでもあろうか。

「三年水鉢 駅」の意味もこれもまた難解である。三年は紀年の一部かとも思われるが定かではない。水鉢は文字通り水を入れる鉢のことであろうが、黒書された土器は坏蓋である。墨書の目的、意味については現在までのところ皆目見当がつかない。識者の示教を得たい。なお、水鉢駅とつづけて読むことは、すでにのべたように、文字の流れから見て無理がある。釈文において鉢と駅の間を空けたのは、駅家名と解される危険をさけるためでもある。

「駅富」はこれで完結していると思われる。富は人名の1部で、駅家の富某をつづめた表現ではあるまいか。この墨書は、駅長の墨書2個を出した住居跡（2F区S136）から出土しており、富某なる人物は駅長であった可能性もある（後述）。

「市」の墨書は、長野県更埴市生仁遺跡、栃木県南河内町薬師寺南遺跡等に類例があり（『伊場遺跡遺物編』2、浜松市教育委員会）、おそらく地方市にかかわるものと推定される。古代の地方市としては、静岡県内では駿河に阿倍市（『万葉集』巻三、284）があり、また美濃の少川市（『日本書紀』41巻、第四）、備後の深津市（同下巻、第二六）などがよく知られている。今回報尻遺跡から「市」の墨書が出土したということは、郡家と市との結びつきという新しい

問題を提起したことになり、古代の地方市を考える上で甚だ興味深い資料といわねばならない。

2 郷名・地名等 前同すでに出土していたもので、今回さらに追加された資料としては「山科」(57、111)、「石田」(66)がある。このうち山科は現在も袋井市内に残る地名である。また、前回この項に含めながら、円圖が付されていることから人名の可能性もあるとした「島津」は今回3点(27、36、48)が出土し、単に「島」(63、96)または「津」(97)とあるもの(ただし、これらはともに島津の一部である可能性もある)も出土した。「島」には頭部に半月形の印が付されている。新出史料としては「板井」(103、107、109)3点がある。これをここに含めた理山としては、『利名抄』高山寺本に筑後国御原郡板井郷(伊勢本、東急本は坂井に作る)がみえること以外特に積極的根拠はない。

3 人名等 追加資料としては「千山」が推定を含め10点出土したほか、「豊門」(88)、「日根」(112)、「子女」(35、43、62)、「宗」(18)などがある。

新出史料としては、「日根大」が推定を含めて8点(26他)出土したほか、「日根」とだけあるもの5点(77他)、「日」(94、95)出土した。これらは「日根」(98)の1点を除き、すべてカギ形の傍線、または円圖を有している点に特徴があり、日根郷または日根駅家の日根にかかわるものと推定されるが、日根大の意味は不詳である。また単に日根とあるものは、「日」も含め、93を除いては3字であった可能性があり、さらに「女」(39)、「大」(40)と1字のみのものも、日根女、日根大の一部であった可能性を否定できない。

「人成」(76)も新出史料である。前回出土の浄土、有主などと同様、人名と見てほぼ誤りあるまい。

4 その他 追加資料としては「竹寸家」(42)〔寸は村の略字〕、「後家」(11)、「東家」(31)があり、「家」(7)、「東」(72)もこの部類かも知れない。

新出資料としては「新家」(34)がある。新はおそらく新旧の新で、新たに建てられた家屋を意味するものであろう。方位関係から名付けられたと思われる東家、後家に対し、時間的な関係に由来すると思われる家屋名称があったことを示す興味深い資料である。なお、古代の氏姓の一つに新家連があるが、この墨書を氏姓とみるのは困難であろう。

次に「竹寸殿」(9、79)の第三字は、判読に苦しんだが、その後第2次調査分の土器の中から新たに「竹寸殿」の墨書が見つかったことから、解読が可能となった。殿は漢語では高人な堂または天子の堂を意味する語であったが、わが国では殿1字で貴人の尊称として用いられ、人名に添用されるようになったといわれる(『大字典』)。法隆寺献納阿弥陀三尊像の台座背面に「山田殿像」の刻銘があり、また伊場遺跡からは「少殺殿」の土器墨書が出土しており、いずれも尊称とみられる。竹村殿もこれと同様の事例とみるべきで、竹村は筥(竹林の意)のことで、人名とし用いられたものであろう(例えば、小野堂)。このように解釈することが許されるとすれば、「竹寸家」とは竹村殿と呼ばれた人物の家のことで、墨書はその家の所有物であることを意味するものといえよう。竹村家が郡家中にある建物の意味するか、あるいは郡家外にあってその什器が郡家内に持ちこまれたものか断断は許されないが、竹村なる人物が尊称をもって呼ばれていることからみて郡司級の人物と思われることを勘案すれば、甚だ興味深

いものがある。

今回出土の墨書の特徴として年次および数字を記したものが数点あることがあげられる。「四年」(52)はこれで完結していたとは思わず、前後に文字がつづいていたであろう。「十四」(55)は上に文字のあった可能性がたかい。

「第」(69)は1字で完結していたと思われる。前回出土の「第刀」と関連するか。「口白」(10)、「口満」(49)については類推の手がかりもない。

小括——佐野郡家と日根駅家 坂尻遺跡の性格については、前稿の「小括——墨書から見た坂尻遺跡の性格」において、1佐野郡家、2山名郡家、3横尾駅家、の三つの可能性を指摘し、そのうち、第1の佐野郡家の可能性が最も高いことを述べた。今回、第2次調査の土器整理中、新たに「佐野郡家」の墨書(3C区井戸〔S I 13〕底より出土)が発見され、佐野郡家説を一層強固にする証拠が加わった。

他方、第3の横尾駅家説については、駅家関係の新史料6種7点が出土し、前回の「駅子」の史料に加えると、実に7種8点の史料を得たことになる。しかも「日根駅家」の墨書が出土したことによって、従来全く知られていなかった駅家名が明らかとなり、佐野郡内には延喜兵部式その他に見える横尾駅に先行して、日根駅家が奈良時代から平安初期にかけ、佐野郡家の附近に存在したことが明らかとなったのである。

しかし、問題はそれだけにとどまらず、「駅長」・「駅子」に加え、「大上日請駅家」のような駅家宛とも思える文書風の墨書や、「三年水鉢 駅」・「駅宮」などの墨書が出るにおよんで、坂尻遺跡自体が日根駅家そのものではなかったかという疑念すら生じかねない事態にたちいたったように思われる。そこで、以下、この問題について若干の考察を加え、坂尻遺跡の性格、ひいてはそこに現れた佐野郡家と日根駅家との関係について、若干の仮説的見通しを述べ、後考に備えたいと思う。

そこでまず、駅家関係の墨書の出土地点、遺構との関連などについて整理してみると、日根駅家および駅長(2点)・駅宮の3種4点の墨書は、2F区(国道北側の中央東寄り)の東西一列に並んだ4軒の竪穴住居の東方の2軒から出土した。そのうち、東端の竪穴(S I 36)からは駅長2点と駅宮、またその西隣の竪穴(S I 35)からは日根駅家が出土した。これら4軒の竪穴は、いずれも一部を発掘したにとどまり、完掘はしていないが、これまでのところでは、奈良時代の後半に4軒同時に存在したものと推定されている。

これらの竪穴には、炉や焼土は確認されていず、4軒とも土器量が比較的に多く、いずれも転用碗を出す点に特色がある。また、この竪穴の南方、国道をはさんだ3F区の奈良時代の溝(S D 2)から前回に「駅子」の墨書が「東家」、「有主」、「玉郷長」などとともに出土し、またそれとはほぼ併行する奈良時代のやや小さい溝の延長(番外溝)からは、「三年水鉢 駅」が「板井」、「市」などとともに出土している。これらに対し「大上日請駅家」は西方にやや離れた2C区(国道北側西方部)の奈良時代前半の小幅の溝(S D 18)に伴う土器溜めの中から単独に出土した。これらの所見から、駅家関係の史料は、「大上日請駅家」を例外として、2F、3F区に集中しており、坂尻遺跡全体から見ると、東北隅の竪穴群とそれらを西および南で他

と区別するかに見える溝の範囲に局限されて出土していることが判明する。

この諸事実は、駅家関係の史料が、その内容の豊さにもかかわらず、坂尻遺跡の中では局限された特定の地点に集中しており、これまでの発掘区全体の性格を決定するような出土状態ではないことが注目されねばならない。しかも、さらにたちいて考察すると、4軒の堅穴はいずれも転用竈を出す上に、灰・焼土などが検出されないなど日常生活のための住居というよりは、事務所的な性格がつよく、十匹の駅馬を備えた東海道の駅家（それは駅長以下10戸の駅戸によって構成されていた）のイメージとはほど違いのものがある。しかも、坂尻遺跡の既発掘部分は、総じて倉庫と見られる経年の建物が支配的で、駅家の施設と見做すべき徴証は極めて少ない。

これに対し、佐野郡家説の根拠となる「×野厨」は国道南側東端部の奈良時代後半の溝（S D12）から出土し、また「佐野厨家」は同西部の奈良時代後半の井戸底（3 C X S I 13）から発見され、少数ながらも遺跡全体に及ぶ出土状態を示しており、坂尻遺跡の一般的性格を表示するにふさわしいものといわざるを得ない。したがって、駅家関係の史料は、坂尻遺跡の本質を規定する佐野郡家という一般的性格の枠内で位置づけられるべきものであり、その逆でも、また二者択一でもあり得ないのである。

では、駅家に直接かかわると思われる4軒の堅穴と坂尻遺跡全体を規定する佐野郡家との関係はどのようなものであったか。この問題について敢て大胆な推測を加えるならば、私は、4軒の堅穴は郡家の東北の隅に置かれたH根駅家の郡家内詰所ともいうべきもので、日根駅家の本体、すなわち東海道の駅路に置かれた文字通りのうまやは、この地点より2、3百メートル南にあったと推定される古代東海道の駅路ぞいにあったと考えるのである。そして、この堅穴の詰所では、恐らく、郡司の統轄下におかれた駅長が、駅子らとともに必要に応じてここに出動し、郡家との事務連絡や必要な書類の作成などを行っていたのではあるまいか。

勿論、こうした推定を支える文献的証拠は残念ながら他に知られていないが、坂尻遺跡での土器罌書とそれを伴出した遺構とは、従来文献からは全く窺うことのできなかった郡家と駅家との密接な関連性を具体的に垣間見せてくれたように思えるのである。坂尻遺跡に現れた佐野郡家と日根駅家との関係は、伊場遺跡の性格をめぐって争われてきた、数智郡家か栗原駅家かという論争にも解決の道を与えるものとなろう。

坂尻遺跡の第2次、第3次調査によって明らかとなった罌書をはじめとする遺構、遺物のありかたは、今回の全調査地域が方2町ないし3町（1町は109メートル）程度の広がりをもつ郡家域の東北隅部分に位置し、郡家の中心部分は調査域の南西方面にあったことを示唆している。こうした認識にたてば、四つの堅穴を中心とする駅家関連遺構は、郡家域の東北端の溝によって区切られた小区域内にあって、いかにも付設された仮屋の感を拭いがたい。伝馬をそのうちに含む郡家と、それとは相対的に独立した機関であつた駅家との関係の具体的究明は、今後のにこされた古代史研究の重要課題の一つであるが、坂尻遺跡はこうした関係の具体的様相を最初にわれわれに提供した、きわめて興味深い注目すべき遺跡といわなければならない。

参考文献（本文中に掲げたものは省略）

『静岡市史』原始古代中世、第3編第2章（静岡市役所 1981年）

原秀三郎「静岡県城山道跡出土の貝注厝木簡について」（『木簡研究』3号 1981年）

『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報——坂尻遺跡第2次調査——』（袋井市教育委員会 1982年）

『袋井市史』通史編、第3編第2章（袋井市役所 1983年）

坂尻遺跡出土主要土器墨書一覧

1. ここには、坂尻遺跡出土の土器墨書のうち、主なもののみを掲出した。
2. 第一次調査で出土したもの、および第二次調査分で新たに発見されたものは、第二次調査欄に含めて、その旨を記した。
3. 本表作成には、佐藤正知君の協力を得た。

分 類	第 一 次 調 査	第 三 次 調 査	
		追 加 資 料	新 出 資 料
1. 役所名・職名等	「×野研」「玉郷長」 「駅子」 「佐野研家」（追加）		「日根駅家」「駅長」 「駅富」「駅」 「大上日端駅家」 「三年水鉢 駅」 「市」
2. 郷名・地名等	「日根」「西辺」「山科」「西田」「山科」「石田」「島津」 「島津」「石田」「前下」 「岡口」「新門」「川黄」		「坂井」
3. 人 名 等	「千山」「浄主」「有主」「豊門」 「秋」「沢」 「足」「真」「宗」「市」 「日根女」「女子」「子女」 「日根門」（第一次調査）	「千山」「豊門」 「宗」 「日根」「子女」	「入成」 「日根」「日根大」
4. そ の 他	「竹寸家」「竹寸」「東家」 「後家」 「第刀」「竹寸殿」	「竹寸家」「東家」 「後家」	「竹寸殿」「新家」 「四年」「十四」「廿」 「白」「満」「第」

遺物番号	釈文	器種	墨書部位	出土遺構層位	図版番号	挿図番号	備考
99	御長	須恵器無台环身	底	2F S I 36	8 24	19 7	107 卜同筆力
100	御長	須恵器無台环身	底	2F S I 36	8 25	19 6	106 卜同筆力
101	御富	須恵器高环	底	2F S I 36	8 26	19 4	
102	□	須恵器环蓋	内	3F S D 24			
103	板井	須恵器环蓋	内	3F S D 24	8 28		
104	□	須恵器無台环身	底	3F S D 24			
105	市	須恵器环蓋	内	3F S D 24	8 27	19 2	
106	□	須恵器环蓋	内	3F S D 24			
107	□(板々)井	須恵器無台环身	底	3F S D 24			
108	板井	須恵器有台环身	底	3F S D 24			
109	板井	須恵器無台环身	底	3F S D 24			
110	二年水鉢 脚	須恵器高环	底	3F S D 24	8 29	19 8	
111	山科	須恵器环蓋	内	2F S I 35			
112	日根□	須恵器無台环身	底	2F ヒット			
113	□	須恵器皿	底	2E 上板状遺構			
114	□(口カ)	須恵器环蓋	内	2F S I 35			
115	日根脚家	須恵器环蓋	内	2F S I 35	8 30	19 1	
116	大上日語脚家	須恵器环蓋	内	2C S D 18	8 31	19 3	
117	佐野脚家	須恵器有台环身	底	3C S I 13	8 32	19 5	第二次調査出土分

遺物番号	取	文	器	種	番号部位	出土遺構層位	図版番号	挿図番号	備	考
98	H□(根々)		須恵器有台坏身	底	3D g III a・b 層					
97	津		須恵器坏蓋	内	3D d III a・b 層					
96	(鳩)		須恵器無台坏身	底	2D g II 層	8 23				
95	U x		須恵器皿	底	2C S D 18					
94	U □		須恵器無台坏身	底	2C S D 18					
93	H 根		須恵器坏蓋	内	2C S D 18	8 22				
92	H 根大		須恵器坏蓋	内	2C e III a 層	8 21				
91	H 根大		須恵器皿	底	2C e III a 層	8 19				
90	X 根大		須恵器無台坏身	底	2C S D 18	8 20				
89	廿		須恵器無台坏身	体	2C S D 18	8 20				
88	豐 □		須恵器無台坏身	底	2B S D 18					
87	口 根 (大々)		須恵器無台坏身	底	2B S D 18					
86	口 □		須恵器無台坏身	底	2B S D 18					
85	太		須恵器無台坏身	底	2B S D 18					
84	日 根大		須恵器坏蓋	内	2C S D 18	8 17				
83	日 根		須恵器坏蓋	内	2B S D 18					
82	H 根大		須恵器坏蓋	内	2B S D 18					
81	()		須恵器皿	底	2A S D 18					
80	H 根大		須恵器無台坏身	底	2C S D 18					
79	(竹さす) (殿々)		須恵器無台坏身	底	2C S D 18					
78	口 x		須恵器無台坏身	底	2C S D 18					

遺物番号	契文	器種	器部位	出土遺構層位	図版番号	挿図番号	備考
77	(H) □ (根々)	須恵器無台坏身	底	2C SD 18			
76	人 成	須恵器無台坏身	底	3I ビット	8 18		
75	□ (根々)	須恵器皿	底	3H SD 8			
74	千 山	須恵器坏蓋	内	3H SD 8			
73	千 山	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
72	東 □	須恵器坏蓋	内	3H SD 8			
71	□ □	灰釉陶器	底	3I SD 15			
70	第	須恵器有台坏身	底	3I SD 16	7 16		
69	第	須恵器無台坏身	底	3I SD 16			
68	□	灰釉陶器	底	3I SD 16			
67	石 田	須恵器坏蓋	内	3I SD 16			
66	石 田	須恵器無台坏身	底	3G d III 層	7 15		
65	□	須恵器有台坏身	底	3G e III 層			
64	驛	須恵器坏蓋	内	3G SD 6	7 14		
63	嶋	須恵器坏蓋	内	2G c III 層			
62	子 □	須恵器坏蓋	内	3F g III 層			
61	□ □ (H 根々)	上師器無台坏身	底	2G SD 2			
60	王 □	上師器無台坏身	底	2G SD 2	7 13		□部分ハ、或ハ文字ニハアラザルカ
59	□ (東々)	須恵器皿	底体	3F ビット			
58	山 科	須恵器皿	底体	3F ビット	7 12		文字ニアラズ 一筆ナリ
57	山 科	須恵器無台坏身	底	3F ビット			

遺物番号	契文	器種	墨書部位	出土遺構層位	図版番号	挿図番号	備考
36		須恵器無台环身	底	3F g Ⅲ層			
37		須恵器無台环身	底	2G c 東側排水溝			墨付アルモ文字ニハミエズ
38		須恵器环蓋	内	2G c 東側排水溝			
39		須恵器环蓋	内	2G SD 4			
40		須恵器环蓋	内	3F g Ⅲ層			九印カ
41		須恵器有台环身	底	2F f Ⅲ層七面			
42	竹 _子 	須恵器無台环身	底	3H d SD 8			
43	子	須恵器無台环身	底	3H d SD 8			
44		須恵器無台环身	底	2F SD 2	7 7		文字ニハアラザルカ
45		須恵器环蓋	内	2F SD 2			
46		須恵器有台环身	底	2F SD 2			明部ニ墨付アルモ文字数不明
47		須恵器有台环身	底	2F SD 2	7 8		
48		須恵器無台环身	底	2F 溝状遺構	7 9		第一字ハ「衣」アルイハ「衣」カ
49		須恵器無台环身	底	3C SI 13			
50		灰釉陶器	底	2F c 排水溝			
51		土師器無台环身	底	2F c 排水溝			
52	四年	須恵器环蓋	大井	2F SI 12	7 10		
53		須恵器环蓋	内	2F c Ⅲ層			文字ニハアラザルカ
54	平	灰釉陶器	底	3F 溝状遺構			明部ニモ同一ノ墨書アリ
55		須恵器环蓋	内	3F 溝状遺構	7 11		
56		須恵器無台环身	底	3F SD 2			

遺物番号	釈文	器種	墨書部位	出土層標層位	図版番号	挿図番号	備考
15	千山	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
16	山	須恵器無台坏身	底	2H SD 12			
17	山	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
18	山	須恵器无台坏身	内	2I SD 12			
19	山	上師器無台坏身	底	2I SD 12			成ハゼンマイ印カ
20	山	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
21	山	須恵器無台坏身	底	2H SD 12			
22	山	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
23	山	須恵器无台坏身	内	2I SD 12			
24	山	須恵器有台坏身	底	2I SD 12			
25	山	灰釉陶器	底	2F SD 18			
26	山	須恵器坏蓋	内	2B SD 18			
27	山	須恵器無台坏身	底	中央区 表採			
28	山	須恵器無台坏身	底	中央区 表採			
29	山	須恵器坏蓋	内	3F SD 12			
30	山	須恵器坏蓋?	内	2I SD 12			
31	山	須恵器無台坏身	底	2F SD 12			
32	山	小皿	底	2G SD 12			菱形印カ 中世小皿
33	山	須恵器無台坏身	底	3H SD 12			
34	山	須恵器無台坏身	底	3J SD 12			
35	山	須恵器無台坏身	底	表採			

第5表 坂尻遺跡第三次調査出土土器墨書一覽表

凡 例

1 □は解読不能の文字或いはその残画を示す。
また、組版の都合で、推定による釈文は□
の下に括弧で示した。
2 ×は、欠損のため文字は現存しないが、か
つて、字以上の文字があったと推定される

場合を示す。
3 挿図・図版番号は、本文の挿図・図版番号
と同一である。
4 遺物番号は、原論文の遺物番号と同一であ
る。

遺物番号	釈文	器種	墨書部位	出土遺構層位	図版番号	挿図番号	備考
1	① 千山	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
2	① × 山	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
3	□ 女	須恵器有台坏身	底	3H SD 8			
4	① 千山	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
5	①	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
6	□ □ (太カ)	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
7	□ 家	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			
8	① □ (千カ) ×	須恵器环蓋	内	3H id			
9	竹寸 □ (敵カ)	須恵器环蓋	内	3I SD 12	7 1		
10	□ 白	須恵器环蓋	内	2I SD 12	7 2		
11	後 家	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
12	①	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
13	① × 山	須恵器無台坏身	底	2I SD 12			
14	子 女	須恵器無台坏身	底	3H SD 8			



北区完掘状況（西より）2A区～2D区



西5区完掘状況（東より）3D区

図版第 2

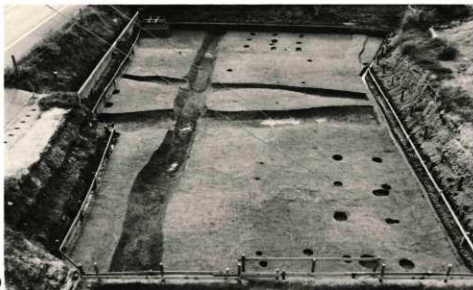
S D18

S B16

S B17

S B18

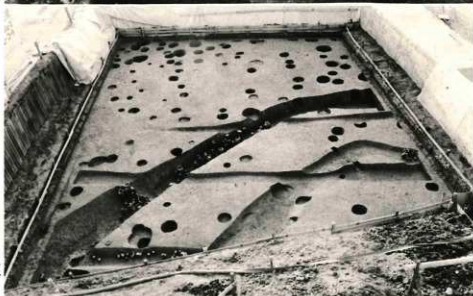
北1区完掘状況
2A2B区(東より)



S D23

S B27

西6区完掘状況
3Ea・3Ed区
(東より)



S I38

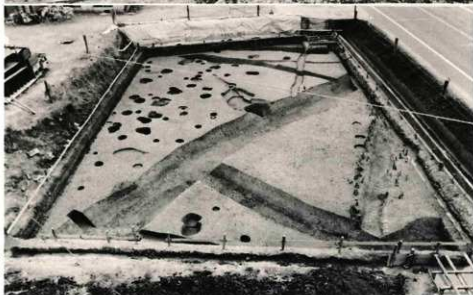
S D24

S B28

S B29

S B30

中央00区完掘状況
3Eg・3Fa区
(東より)





S D21
遺物出土状況



S D21
完掘状況



S D23
土器出土状況

S I 38
遺物出土状況



S D 19
土器出土状況

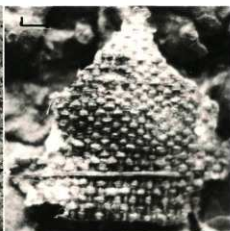


2Ef・イ区
土器出土状況





1. SD25 絹織物出土状況



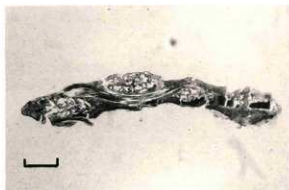
2. 絹織物 scale 1 mm



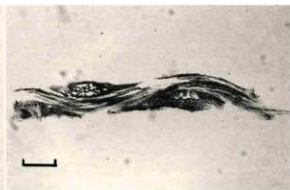
3. 絹織物 scale 1 mm



4. 裏面(漆?) scale 1 mm

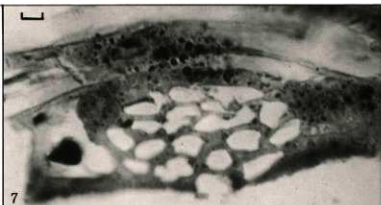


5. 緯糸方向の断面 scale 0.1mm



6. 経糸方向の断面 scale 0.1mm

経糸断面拡大図 scale 10 μ



緯糸断面拡大図 scale 10 μ



1



4



2



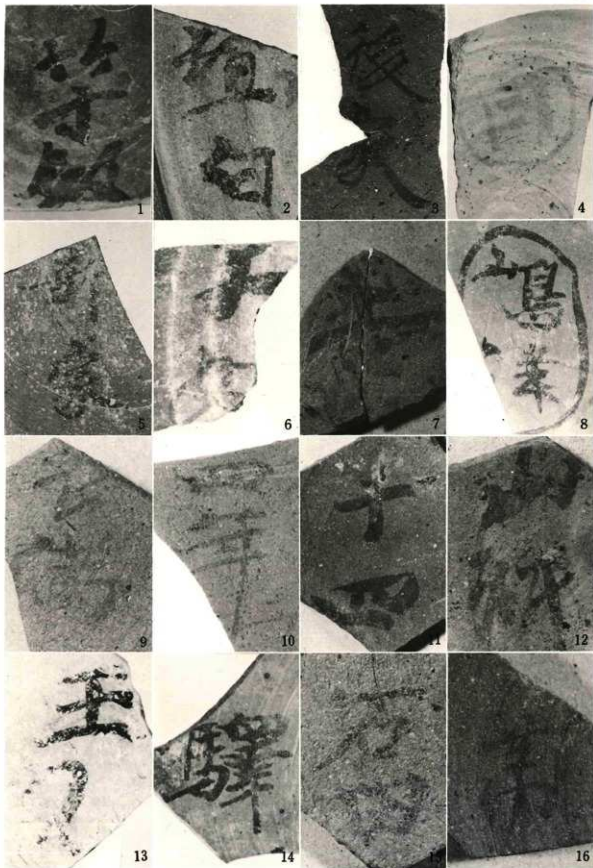
5

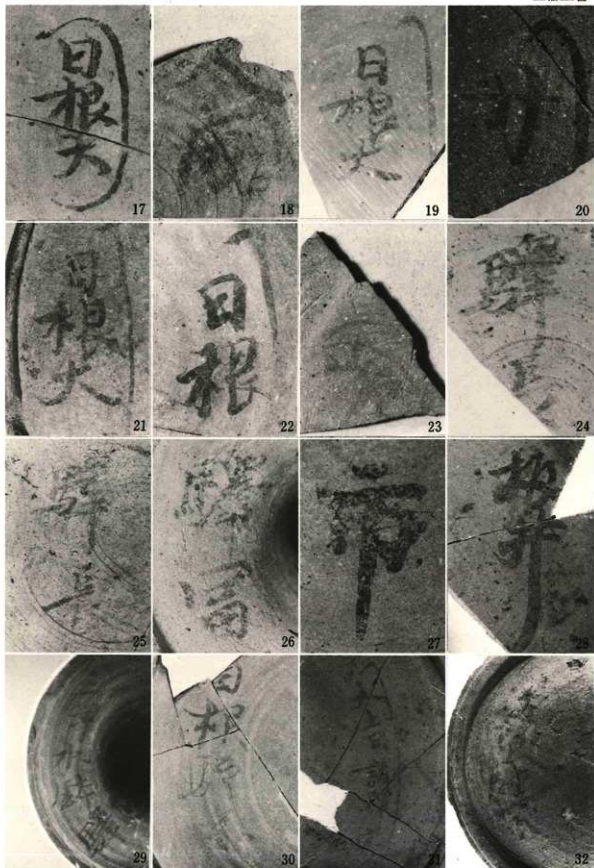


3



6





一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）

埋蔵文化財発掘調査報告書

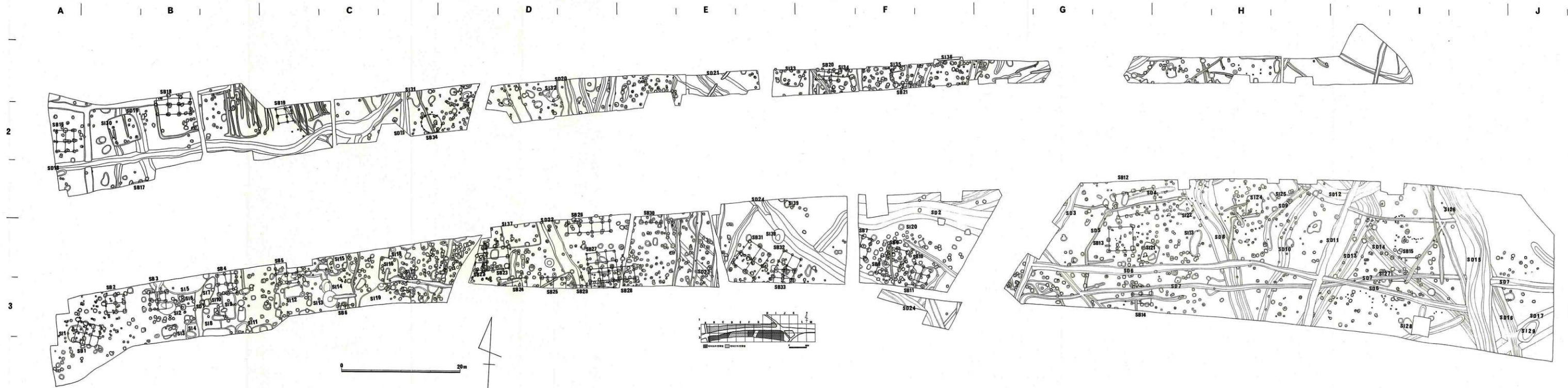
—坂尻遺跡第3次調査—

1983年3月31日

編集 袋井市教育委員会

浜松市中沢町1-1

印刷所 株式会社 開 明 堂



坂尻遺跡主要遺構全体図

(昭和56年度・57年度発掘調査)